第十條　每日五時間自前十時至午後四時惟冬日自午前十一時至午後三時

第八節　考試

第十一條　考試分爲二種曰大考曰小考大考於每學年末行之合式者升班以進小考於每學期末行之憑其優劣以定席次

第九節　憑照

第十二條　卒業者授以卒業憑照年長而品學兼優者加給特別憑照准其充當本堂副教習及他小學堂教習

第十節　年限

第十三條　尋常科四年高等科四年專修科三年補習科二年

第十一節　休息日

第十四條　定例如左

一　星期日

二　星期前半日

三　清明節

四　家廟大祭日　四月初十日

五　端午節　五月初九日

六　王爺千秋　六月廿六日

七　皇上萬壽　七月初三日

八　鄂傑大祭日　七月初十日

九　家廟大祭日　八月初六日

十　福晉千秋

十一　中秋節　十月初十日

十二　皇太后萬壽　十月初十日

十三　家廟大祭日　十一月初十日

十四　學堂開辦日

十五　年假及冬假（十一月十五日起三月十四日止）

（日本國新年假三日紀元節天長節地久節各假一日）

第十一節　退學

第十五條　學生不准半途退學如遇不得已之事段當由家屬具事由書呈堂經總理許可方准退學優待

第十六條　堂中僅備午餐路遠者准其寄宿

第十七條　來學諸生均以子女相待務使人々如得家庭之樂

第十八條　學生如有身體不爽晙係確實准其停學數日

第十二節　優待

第十九條　一律藍布長衫距袖口二寸第一年生釘黑帶一條第二年生釘二條餘類推着黑布快靴夏戴草帽冬戴暖帽不得以華麗競外觀

第十三節　服式

第二十條　平日在學堂及途次遇王爺福晉太福晉及王府尊貴均行最敬鞠躬禮

第廿一條　對堂中教習及辦事人員亦行鞠躬禮

第廿二條　對同輩亦行鞠躬禮

第十四節　學生必要

第廿三條　學生均須正心勵行養成溫良貞淑之女德

第廿四條　平日均須厚禮讓重信義堅守堂規及教習之教訓

第廿五條　宜節飲食多運動

第十五節　斥退及懲罰

第廿六條　犯堂規重者當衆斥退輕者罰如左

一　訓戒

二　申斥

三　面壁立(輕者一點鐘重者兩點鐘)

四　立講堂外(輕者兩點鐘重者三點鐘)

第十七節　游覽學堂者必要

第廿七條　普通游覽者須先一日具名重報總理許可領有憑籤即可由幹事領觀

第廿八條　特別之遊覽人先一時具名通知總理領有憑籤即可由幹事隨意領觀

第廿九條　無論普通特別遊覽人參觀後無所疑問即退出不得遲留

第三十條　婦女來堂遊覽僅由門公告知幹事可領觀

四　最初の學堂

ばじめ王爺の學堂をひらかんとて、旗内に女子を入學せしむべき樣布告したまひし時旗内の人々の感想並びに評判は實に意表に出でたり。曰はれざすぎ廿年の昔、我邦開國の當時は亦かゝる狀態ならざりしか、長足の進歩は今日我邦の現狀を生み出だしたりとはいへ、顧みて其源を思へば、そを笑ふべきにもあらじ、さはいへ、あまりに奇怪に感じたれば、其一二を紹介せん。

○「今度王府へは、洋人が來たさうだ、それについて王が娘を連れて來いといふことだが、王府へ連れて行つて、全體どうするのだらう。」

△「王は今度百名の女兒を集めて、日本へ送られるそうだ。」

×「日本へ送つてどうするのだらう。」

〻「日本人が、食べるのださうだ。」

〻「いや、さうでない、殺して骨を取つてシャボンを製へるのださうだ。」

◎「いや、さうでもない、眼をえぐり取つて寫眞に使ふのださうだ。」

又我の、王府内の大工に命じて、桌や椅子を造らしめしに對しては。

「娘達を王府へ連れて行くと、洋人が木の籠の中へ入れてしまう、あゝ、おそろしや、おそろしやこんな王の下にあつては、今にどんな目にあふも知れぬ、他旗へ逃げ出すに限る。」

王も、王妃も、土民の沒分曉には困じたりとて歎息せられしが、我は先づ、後宮の侍女のみにてもよければ、授業を開始すべく、次第に事の明かとなるに從ひ彼等よりすゝみて、望み來るべければ、と申しあげ、學堂を開くに決したり。かくていよ〳〵開始せしに、學生の喜びは非常なるものにて、殆んど夢中の有樣にて、勉強しながら、柔かきものを掌中にてまるむる如く王爺福晉は非常に喜びたまひて、福晉は日々生徒と共に學び給ひぬ。それより半月程へたる頃、王府外の者の間に、學校に行けば、種々のことを覺えらるとのうはさたち、二ヶ月の後には、父母より進みて入學を願ひ出づるにいたりたれば、王の喜び給ふこと一方ならざりき。

思ふに蒙古人は、清朝の康熙帝の政略、巧みに其功を奏し、喇嘛教のために迷信深く、氣骨なき人民となりたれば、善きことなりとて、新らしきことを、かくかくせよと

教へ知らすも、到底固陋なる彼等の心を動かすに足らず、先づ、始めは彼等の注意の有無に關せず、事を始むれば、次第にいつとなく、注意をよびおこし、遂には我を折りて、彼等より教を乞ふにいたるものなれば、其時に及びて、其心に如何にもと納得する樣授くるときは、深く腦に應へて教へしことの眞に彼等のものとなるが如し。これ實に我が經驗の示せる最も宜しきを得たる方法なりと信ずる處なり。

五　學堂の狀況

陰曆新年に入りて、學生の數はまして六十名に達したれば之れを三學級に分ちて教授せり。年齡は幼者は七八才より、年長は二十三歲(二十歲以上のものは一人のみにて多くは十四、五、六、七歲位なりき)にいたり、學科は讀書、日本語、算術、地理、歷史、習字、圖畫、編物、唱歌(日歌、蒙歌)體操にして、讀書は日蒙漢の三種を教へたり。技藝は學生等の最も好みし處にして、從て甚だ巧みなりき、編物の如きは各級何れも喜びて從事せり。此の國の人々は語學の才能ある爲めか、はた其腦の單純なるによりしが、日本語の如きはよく記憶し、巧みに會話せり、學科中最も劣等なるは數學にして、從

て教授に困難を感じたるが、學生等はさほど、嫌厭する樣子もなく、熱心に勉强し、中には、極めて明晰なる頭腦を有するものありき、地理歷史の觀念は皆無なり。これは生徒のみならず、大人も亦然り、されば我は室內に大なる地圖を揭げおき、官吏等の來りし時などには、よく說明せしが、彼等の中には世界に中國の外尙大なる國ありとて、驚けるもの少なからず。思ふに此人々は、地球の圓きか、三角なるかを知らず、只中國と稱する一つの大なる國其中央にありて、西の方には西洋といへる如何なるものか知らざるものあり東の方には(東洋、支那にては皆日本をさして東洋とよべり。されば學問せざる支那人にむかひて、汝は東洋人なりといはば、必す否、我は東洋人ならず。中國人なりと答ふべし)とよべる、豆粒程の小さき國なりと信ずるものゝ如し。されど、露國多年の經營苦心によりて、此極めて單純なる腦中にも、殆んど全蒙古を通じて、露國は怕ろしき國なりとの印象、深くしみ亘りしは、驚ろくべきにあらずや、思はずも筆は岐路に入れるが、學生等の學用品は、皆妃より給はり、また、王府外より來る生徒の往復には、王府の馬車を用ひたり。此馬車は恰も日本の大八車位の大さにして、これに、蓋をつけ、二頭乃至三頭の馬に、ひかしむるなるが、

毎朝早く、王府を出て、一々生徒の家を廻り、九時半迄に、二臺の車は、外來の生徒を運び來るなり。かくて十時より、授業せしが、昼飯は王府にて給ふなり。午後四時授業終れば、再び車は生徒を一々其家に送り屆けて、夕暮近かく歸り來るを例とせり。かく往復の途迄、馬車にて送迎されて、教育さるゝは、誠に厚遇いたれりつくせるものなれども、其父兄等は左程感謝するが如く見えざりしも、追々其ありがたさを謝するに至れり。

毓正女學堂同窓談話會規則

一、本會稱爲毓正女學堂同窓談話會

二、本會以增進學生之智德及練習語言爲目的

三、本會以毓正學堂之學生爲會員

四、會場設於本學堂毎月月初第一日行期六開會、談話中各守靜肅不得有喧嘩之舉動宜注意

五、本會設如左之職員

會長　總理會務

副會長　輔佐會長、會長有事故時可代之

幹事三名、受會長之旨而司會務

書記一名、承會長之指揮而司庶務

有時副會長兼之

六、職員以投票定之任期一年

但同一人得再選

七、議事之可否以過半數決之可否同數之時會長決之

八、其他要件可臨時增定

かくて日を經るに從ひ、次第に整頓し來り、日本の學校と大差なきに至りぬ。元來此國の婦人は極めて不規律なる家庭に、我儘に養育されたるものなれば、日本風の考にて始より、整然たる秩序を立てゝ教育せんとするも、之は到底効果を奏するものにあらず。始め三四ヶ月乃至半年間は、悠長に親切に指導し、知らず識らずの間に、秩序的生活に慣れしむるを巧なる寸法なりと信じぬ。

又生徒の言語練習の目的にて、毎月月末に談話會を開き、其會毎上級生をして日

本語をなさしめしが、なか〳〵に巧みに語れり。

六　園遊會

就學の奬勵法につきては、王御夫婦を始め、我も種々心を惱ましたりき。兎に角。父兄に迷惑を感ぜしむるは策の得たるものにあらず。學堂を此の上なき結構なる場所、是に上らざれば甚だ不利なりと感せしめ彼等より進みて來る樣せばよからむとのことに、前に述べたる如く、生徒の送迎には馬車を用ゐ、學用品は一切王妃より給與され、ことに午饌迄も給されしに、其効果暫らくは見えざりしかば、我は深くこれを遺憾とし、思案の結果、畢竟未だ十分に教育思想の普及せられざるが、ためなりと感じたれば、王妃に一策を献じたり。そは日本の園遊會の如きものをひらきて、廣く土人をあつめ、教育思想を鼓吹せば如何とのことなりき。王妃には至極よからむと快諾せられ、果實の豐熟せし陰暦八月の下旬之れを開催せられぬ。參集の土人は官民凡そ三百名程にして、生徒の製作品を觀覽せしめ、或は日蒙の唱歌をきかしめ又生徒等の可憐なる物語を聞しめなどし、王、王妃並びに我よりも、平易

園遊會女生徒手工品陳列場

園遊會入場券（表）

園遊會入場券（裏）

に教育の必要を說き聞かしめしが、一同は、大に教育といふことを了解せる如く、殊にうれしかりしは、我につきての疑念を晴らし、安心を與ふるを得しことなり。女一人にて遙々日本より蒙古に來りしといふことの、如何にも恐ろしく聞えて、土人は皆、惡相の、意地惡の、邪慳なる女と信じたるものゝ如かりしが、我を見たる彼等は其然らざりしを悟りしか、既に會集同士間に、かはされし會話の中にも、大層親切らしき人なり、又はありがたき人なり、等の語ももれぬ。此園遊會は意外の成功を收めたれば、其後は毎月二三回づゝ、土人を集めて講話せり。かくて學堂の評判は次第に遠方に傳はり、又我につきても、これ迄は、外國

の婦人の、何のためにか來りしとて、恐怖の眼もて、見しものゝ、此度は、斯年若き婦人の、唯一人、遙々此地迄來られしものを、いかで、我等のなすことなくて、すごさるべきとて、我身の入蒙の彼等を勵ます一因となりしは、望外の幸とやいふべし。

翌年の八月、即ち明治三十八年の秋の園遊會には、遠く旅路をかけて集まれるもの多く會衆無慮七百餘名、非常なる盛會なりき。此會は單に教育上の効果を收めたりしのみならず、王と人民との關係を一層親密ならしむるに力ありたれば、王も王妃も深く滿足せられぬ。

尙參考のため園遊會場及其次第を次に掲げん

毓正女學堂園遊會規則

品茶處　中西茶　學生四人經理

沽酒處　中西酒　學生四人經理

菓子屋　點心水菓　學生四人經理

學堂陳列所（圖書外人寄贈物　手工科編製物）　學生四人經理

博物室　中外、古今珍奇品、主管一人學生四人經理

演說臺　雅不傷倍之笑話、領袖一人學生善辭令者分任之

新樂處　學生唱歌　領袖一人全班學生任之

古樂處　蒙古曲

休息處　分一二三等

食堂　分男女兩處宴上等客

園主福晉

助理員七格格

新樂處領袖河原教習

演說臺領袖汪教習

博物室主管伊教習

男客招待員四人

女客招待員四人

下手一點鐘開會至四點鐘止隨意游覽並聽新古歌樂演說等四點鐘開食堂二三等券者是時退出

持一等券者食畢散會

持二等券者隨意入茶酒菓等處飲食

持三等券者只准在園內觀覽

園遊會順序

一、點鐘　行開會式

學生報告

開會歌

隨意遊覽

學生遊戲

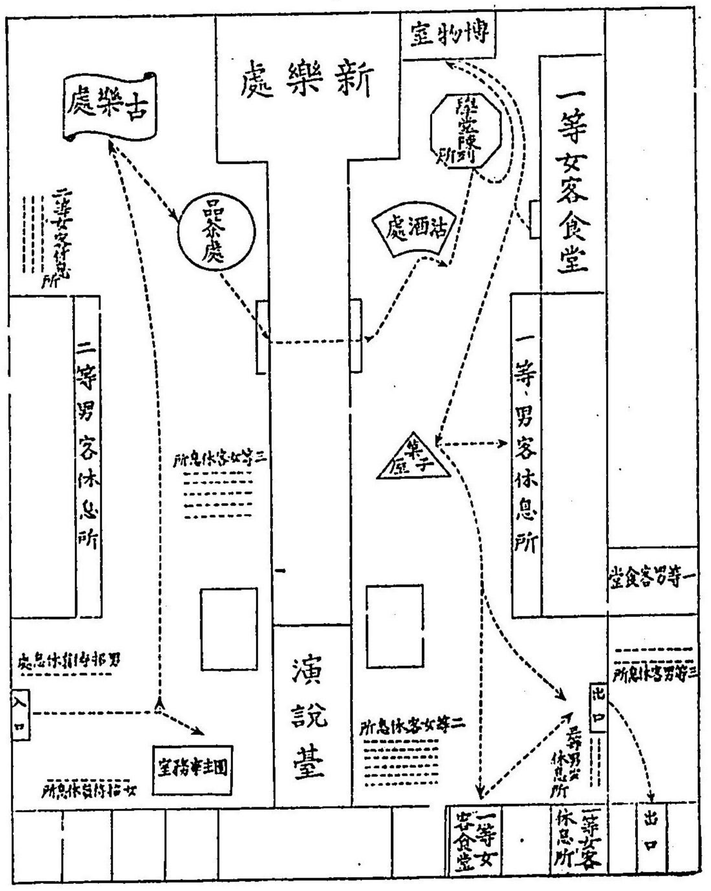
二、點鐘　演說

休憩

遊戲

園遊會歌

三、點鐘　福引


新樂處
古樂處
博物室
一等女客食堂
一等男客休息所
一等女客食堂
一等女客休息所
出口
入口
二等男客休息所
二等女客休息所
二等女客休息所
二等男客休息所
二等女客休息所
二等男客休息所
二等女客休息所
二等男

演　說

出售學堂製品

四、點鐘末一等券者入食堂畢散會

（二三等券者即時退出）

次の唱歌二曲は、喀喇沁王躬ら作し給へるものなり。

園遊會歌

人生之樂々如何。羣樂兮樂無窮。佳時令節屆秋中。此日良辰盛會逢。凡此皆我學校敎育功。凡事孰堪與此羣樂同。喜我嘉賓來。其各盡歡哉。旨酒多且有。兄弟姉妹請開懷。茶菓嘉肴助興趣。古物兼新製。廣列增智識。更有國旗高掛映日明。嗟呼衆志可成城。諸君聽我開會歌。鼓舞歡呼萬歲聲。

樂羣歌

合羣之樂々如何。聽我樂羣歌。吾儕君非素相識。交臂易錯過。相識不相見。河山風雨相思苦。今日天緣奏合。居然握手團々坐。親乎友乎。誰家親友能比會中多。吾儕同戲同遊同息同聲歌且舞。進取原不讓。終如金玉相磋磨。親乎友乎。

試想合羣之樂々如何。

1 — 1 3　2 — 2 1　2 2 3 3　5 — 0
6 — 6 5　1 1 6 6　5 5 5 3　2 — 0
1 — 1 1　2 2 5 5　3 3 5 5　6 — 0
1 1 2 2　6 6 5 5　6 6 6 2　1 — 0
1 1 1 1　2 2 1 6　5 5 3 1　2 — 0
3 3 2 1　3 — 5 5　6 6 6 1　5 — 0
1 — 1 1　6 6 5 5　3 3 2 3　5 — 0
2 2 2 1　6 — 5 3　2 2 3 2　1 — 0

園遊會の福引

牙藥	刷牙散	齒磨粉を與ふ
南海的一大島	臺灣（太碗）	大なる碗を與ふ
東方的一小國	高麗（菩梨）	菩藥と梨を與ふ
蒙古人的寶貝	小米（若在蒙古沒有小米就不能生活）	粟を與ふ

宋代的學者	朱子(竹子)
寸鐵刺人	針
秋風之怨	扇子(到秋沒有人使)
了頭嫌之	擦布(嚴寒還得用之)
黃石公的鞋子	古靴(是當年黃石公穿的)
征人斷腸	笛子(天山曙後海風寒橫笛偏吹行路難 或裏征人三十萬一時回首月中看)
萬里相談	信紙、信封(一片信紙萬里 尚可以說話)

七　時間割と生徒の成績

學堂に於ける、己が務めと、其務めを果せし成績の一部を紹介せむため、左に、時間割と、生徒の成績の一般を掲げむ。

光緒三十一年自三月二十一日至十月十五日

時間表

頭班　自十時至十時五十分　自十一時至十一時五十分　自一時至一時五十分　自二時至二時五十分　自三時至三時五十分

月	日文 河原	習字 伊	算術 河原	溫習 汪	漢文 汪
火	蒙文 伊	日語 河原	唱歌 河原	習字 伊	歷史 汪
水	日文 河原	體操 河原	算術 河原	溫習 伊	修身 汪
木	蒙文 伊	圖畫 河原	體操 河原	家政 河原	地理 汪
金	日語 河原	唱歌 河原	圖畫 河原	編物 河原	漢文 汪
土	蒙文 伊	圖畫 河原	日文 河原	漢文 汪	習字 伊

二班

月	算術 河原	圖畫 河原	日文 河原	漢文 汪	習字 伊
火	蒙文 伊	日語 河原	唱歌 河原	修身 汪	溫習 汪
水	算術 河原	體操 河原	圖畫 河原	漢文 汪	習字 伊
木	蒙文 伊	編物 河原	體操 河原	修身 汪	溫習 汪
金	日文 河原	唱歌 河原	日語 河原	漢文 汪	習字 伊
土	蒙文 伊	算術 河原			

三班

月　蒙文（伊）　算術（河原）　溫習（日）　日語（河原）　修身（富林泰）
火　日文（河原）　蒙文（伊）　唱歌（河原）　編物（河原）　漢文（富林泰）
水　蒙文（伊）　體操（河原）　圖畫（河原）　習字（伊）　修身（富林泰）
木　日文（河原）　圖畫（河原）　體操（河原）　溫習　漢文（富林泰）
金　蒙文（伊）　唱歌（河原）　算術（河原）　習字（伊）　漢文（富林泰）
土　日語（河原）　編物（河原）

生徒の成績は、其技藝に屬するものは、之れを紹介すること困難なれば、筆答せるものゝ二三をげん。

問題

一、桃花開了（タオホアーカイリヤウ）　二、梅花謝了（メーホアーシエーリヤウ）
三、悠乏了麼（ニヨウフアーリヤウモ）　四、悠喝茶（ニヨウホチヤ）
五、給悠點心（ケイニヨウテンシン）　六、請悠把剪子借給我（チンニヨウパーチエンツーチエーケイウオー）

答　頭班　蘭貞

一、モモノハナガサキマシタ
二、ウメノハナガチリマシタ
三、オスカレニナリマシタカ（オツカレの誤）
四、チヤヲメシアガレ
五、オカシヲアゲマス
六、ハサミヲアナタノクダサイ
（アナタノ、ハサミヲカシテクダサイと書く可きを）　頭班　金屏

一、モモノハナガサキマシタ
二、ウメノハナガチリマシタ
三、オツカレニナリマシタカ
四、オチヤヲメシアゲレ（アガレの誤）
五、オカシヲアゲマス
六、アナタノハサミヲカシテクダサイ

一、モモノハナガサキマシタ
二、ウメノハナガチリマシタ
三、オツカレニナリマシタカ
四、オチヤヲメシアゲレ（アガレの誤）
五、オカシヲメシアガレ（アガレの誤）
六、アナタノハサミヲカシテクダサイ

第三學年第二回試驗問題

（光緒三十一年八月　明治三十八年十月　施行）

頭班　水仙

日文問題

一、左の文の全體を平假字に書き換へ、側線ある處に漢字をあて、○の處に助辭を挿入し、更に其の全文を漢譯せよ。

カド○マヘ○、キレイ○コガハ○アリマス、コレ○ウシロ○コヤマカラ、ナガレテクルノデゴザイマス。

ヲトヽヒカラ、ブリツヽイタオホアメ、ミズカサ○、ダイソーフエマシタ。

二、左の文を漢譯せよ。

一、なにか、その猫をふせぐよいくふうはあるまいか。

二、だれからならひましたらふ。

三、それは、たぶん、おはなさんが、かいたのでございませう。

三、左の文を和譯せよ。

一、再五六日就要作繭。

二、很聽話馴良的馬。

日語問題

左の諸題を漢語に書け。

一、只今は秋でございます。

二、秋の月は、たいへんよろしうございます。

三、秋は月もよろしうございますし、果物もありますから、私は秋がすきでございます。

四、今年の年がらは、どうでございますか。

五、今年は果物のとりいれが、たくさんございますか。

左の諸題を日本語に直せ。

今天天氣悶熱

寒暑表到九十五度了

聽說從前沒有這麼熱

野外逛去了麼

這米天天氣沒準兒昨天暖和、今天狠冷、這樣的天氣得病的不少。

日文問題答案　頭班　蘭貞

門の前に、清きれいな小河があります、此は後の山から、流て下るのてございます。

昨日ひから、降りつゞいた大雨て水かさが、たいそーふえました。

右漢譯

門前有清涼小河

這河是從後山流下來的

昨天連下太雨水狠流了

和文漢譯

一、有甚麼防猫的法子沒有。

二、從誰學的。

三、即個是概精是阿花姐所寫的罷。

漢文和譯

一、も、ごろくにちも、ただらまゆをつくるてございませう。

二、よくゆーことをきて、うとなしいうまございます。

日語答案

和文漢譯

現在是秋天。

秋天的月亮狠好。

秋天月亮好、果子也有、因爲我愛秋。

今年果子收得多不多。

今年的年成怎麽樣。

漢文和譯

今日は、天氣がむしあつうございます。

寒暑表は何度になりましたか、九十五度になりました。

聽說はれば、い前こんな熱さはないそでございます。

野に行きましたか。

此のごろは、天氣がきまりません昨日は暖和でございます、今日はたいへんさむございます、こんな天氣には病人たくさんあります。

第二學年第二回試驗問題　（光緒三十一年八月　明治三十八年十月　施行）

日文問題

一、左の文の全體を平假字に書き換へ、側線のある字を漢字に、又○の處に適當の助辭を挿入し、更に全體を漢譯せよ。

コノウマ○ゴランナサイ、ヨクフトッテヰテ、ヅヨサウデゴザイマセウ、ナ○シロ○イヒマス、ヨクイフコト○キイテ、オトナシイ、ウマ○ゴザイマス。

二、左の文を漢譯せよ。

一、あそこに、ふたりが、つみくさをしてをります。

二、あのつばめは、きよねんきたのでございませう。

三、このこどもは、よそへはゆきません。

三、左の文を和譯せよ。

一、今天是女學堂的園遊會。

一、候兒也不能放心。

日語問題

一、左の諸題を漢語に直せ。

一、あなたは、昨日外出なさいましたか。

二、はい、私は昨日友人を訪ねました。

三、先生は、ごきげんよろしうございますか。

四、ごいっしょに公園に散歩いたしませうか。
五、ちょっとおまち下さい。

二、左の諸題を日本語に直せ。

一、這是狠累贅的事情。
二、今兒好天氣狠暖和了。
三、天不早了回去罷。
四、我們到了花園了。
五、外頭有南風土很多。

作文

春

日文答案

二班　保貞

この馬をごらんなさい、よく肥強てゐて、樣さうでございます、名は、白といひます、よくいふことをきいて馴良馬でございます。

白は、樣樣のしごとをいたします。

右漢譯

請看這個馬、狠聽話馴良的馬。
白作種種的。

和文漢譯

一、那邊兩個人摘草呢。
二、那個燕子是去年來過的罷。
三、這個小孩不往別處去。

漢文和譯

一、コンニチハ、ジガクノエンユーカイデス。
二、スコシノマモユダンガデキヌ。

日語答案

和文漢譯

一、恁昨天出們了麼。

二、是我照明友去了。
三、先生好麼。
四、偕們一塊上花園子遊達去罷。
五、請等一等。

漢文和譯

一、コレハ、タイヘンゴメイワクナコトデス。
二、コンニチノテンキハ、タイヘンアタタカニナリマシタ。
三、オソクナリマシタカラ、カヘリマセウ。
四、ワタクシトモハ、コーエンニキマシタ。
五、ソトハ、ミナミノカゼガフキホコリガタイヘンタチマス。

作文

春

ワタクシハ、ハルガタイヘンスキデス。ナニスキデスカ、イロイロノハナガキレイニサイテヲリマスカラ、ワタクシスキデス。

二 玩玉梅

この馬をごらんなさい、よく肥つてゐて、つよさうでございませう、名はしろと白はたねたねのしごとをいたします。

右 漢譯

請看這個馬、很肥强的樣子、名叫白很聽話馴良的馬。白做種種事。

和文漢譯

一、那一邊兩個人摘草呢。
二、那個燕子是去年來過的罷。
三、這個小孩子不往別處去。

漢文和譯

一、ケフハ、ジョウカノコ、エンユーカイデアリマス。
二、スコシノマモユダンガデキマセン。

日語答案

和文漢譯

一、德昨天出門了麼。

二、是我昨天照朋友去了。

三、先生好麼。

四、我們一塊兒上花園子遛達去罷。

五、請等一候兒。

漢文和譯

一、コレハ、ゴメイハコトデス。

二、コンニチ、ヨイテンキデス、タイヘンアタタカデゴザイマス。

三、オソコナリマシタ、ハヤクカヘリマセウ。

四、コエンニ、ユキマシタ。

五、ソトハ、ニシカゼガフキ、フコリガタイヘンタチマス。

作文

春

ハルガ、イロイロノハナガサイテ、タイヘンキレイデゴザイマス、タクサンノトリガ、オモシロサウニ、オタンテ非マス、ワタクシハ、ハルガスキデゴザイマス。

第十章　雪中梅

一　雪中の梅

我が表面の事業は前に略述せるが如くなるが、偖て我秘密の使命とは何ぞ、そは委しく記しなば。其當時を忍ぶよすがとして、此上なきものなるべきも、如何にせむ、少しく憚る處あれば、大方は省きて、其概略のみを記さんとす。

我が喀喇沁に入りしは、三十六年の十二月のことなるが。これより先き即ち、全年七月より、陸軍歩兵大尉、〇〇〇〇氏、此地の、武備學堂に、盡力し居られき。此學堂も亦、王が博覧會見物の當時視察せられし結果、武備の必要を感ぜられ、〇〇〇部

の方に依頼せられ、日本より、極めて秘密に、此の人を聘せられしなり。大尉は、王宮より日本里程にて、一里程隔たれる、武備學堂内に住ひ、我は王宮内の後宮に住ひぬ。武備學堂の方にては、大尉の外に、二三の日本人居られ、之れを助けられたりし由なり。一月七日、〇〇大尉は、北京に引きあげられ、喀喇沁在留の日本人は、全く我身獨りとなりぬ。かくて、二月、いよ〳〵、日露開戰となりしや歐國側の北部蒙古人等、交る〳〵、此の邊に入りこみ來り、又同國武官等が英國人なり、佛國人なり、ギリシヤア人なりなどいひ、或は道勝銀行即ち露清銀行員なり、又は商人にて、毛皮につき取調べに來れりなどいひて。喀喇沁のみならず、此附近全體に入り來りて、種々の手段によりて、運動を試みぬ。我はこを出來るだけ委しく、取調べたる上、其筋へ注進し、又北京〇〇隊の便利をはかりたり。兎に角、我身一人のみなれば、其双肩に我本國を負ひて立ちし心地して、躊躇しては、彼等に機先を制せらるゝこともやと、心も心ならず、時には王、王妃に請ひて、飛脚を出し、藏きしなど、身自ら驚かるゝことさへ行ひぬ。其當時さる方へ送りし書信の一節は、よく旅内の狀態と、兩國の關係を表はしあれば抄錄すべし。

（前略）旅内に於ける一般人民は戰爭と申すことがよく分り申さず、大砲や、地雷や、水雷や軍艦やを彼等に了解せしむる樣說明するは、非常に困難に御座候。されば彼等は、〇〇戰爭を視ること、冷淡と申さんよりは、全く無神經の方にて、うらなりの南瓜一つ落ちたる程にも考へ居らず候。去かし王府内の官僚に至りては、略ぼ戰爭の意味を解し居り、更に最も能くも〇國を知り居候。中國の外には國らしき國はなきものゝ樣に心得たるものまで、〇國の存在丈は承知致し、殊に金あり、力ありて、强き國なりと、心得居候。之れ〇國の懷柔策が、此邊陲にまで、及び居候を證するに足るものにして、〇人の根氣强く、功を永遠に期する一事に至りては、驚嘆の外これなく候。聞く所によれば、先王參勤の際、在北京の〇公使は必ず王を招待して饗應し、宴散じて歸宅の折には、必ず四千兩を贈る例にて（其の四千兩の内譯は王へ千兩妃及第一の側室即ち現王の御生母へ千兩王子即ち現王御夫婦へ千兩臣僚一同へ千兩）此饗應と贈物とは年々缺かしたることこれ無き由に候。されば官僚の多く、否、殆んど總ては、〇國の同情者にして戰爭は結局〇の勝利に歸すべく、今〇の惡感を買はゞ、後難恐るべければ、速に〇に内服あり

て、然るべしなど王に勸誘するものこれあり候。王御夫婦は賢明に渡らせられ、眼前の小利に迷はせ給はぬ、御性質には、あれど、〇の懷柔策は、王の腦裏にも浸潤いたし居り、其去就につきて事態容易ならざるものこれありしが、百方努力いたし候結果、遂に王をして〇に背を向けしめ候。我本國は、王に向ひて感謝すべき幾多の理由これあるべくと存じ候。昨今、〇人の手先なる、北蒙古人、及び、〇國人多數、當旗内へ入り込み、陰謀をめぐらし居る樣子に御座候。又礦山技師と稱する洋人一名此程より府内に逗留致し居候が。極めて胡亂なるものに候。此間王が誘惑と迫害との包圍を受け居らるゝは、確かなる事實にこれあり、隨つて此場合に於ける自分の責任は、甚だ重大に候。事情此の如くに候に、此地に於ける本國人は、只自分一人に候へば。何時如何なる目に逢はんも測りがたく、萬一の事これあり候節は、國家のために、身を捧げたるものと思召下されたく候。さて又、本國の〇〇隊は、獨り旅順の閉塞船に限らず、裏面の運動にも、忠烈壯烈の志士少なからず候。其第一の組は、二月二十八日當地着、第二の組は〇〇より東方に進まれ、第三の組は三月十二日、第四の組は同月二十日何れも當地へ着せられ、更に部署し、準備して、其れ〳〵深く虎穴に慕入せられ候が。其艱苦は、到底筆紙の盡くす所にあらず候。（下略）

右の消息中、志士に關するふしあれば、少しく其由緒をのべんに。北京の〇〇隊は四十餘名よりなりて、四組に分れ、其中三組は喀喇沁を經て奥深くすゝまれ、一組は、熱河より東に向はれたり。而して其第一組は、東西の二部に分れ、東部には横川、沖の兩君外四名よりなり、其一名は臨光三氏なりき。西部は故伊藤少佐、吉原四郎氏（信州麻漬の人）外四名よりなり、三十七年三月二十日の夜、北京を發せられ、同二十八日の午後喀喇沁に着、伊藤少佐（當時は大尉名は柳太郎氏）の住はれたる、武學堂に宿せられたり。一行中、伊藤大尉と、吉原氏とは途上の支那人等の見知り、居ることの故、喀喇沁迄は日本人として軍服にて見え、此處にて、喀喇僧の服にかへられ。二十九日には一同、王府に見えられ、汪氏の住ゐ居る室にて、王の心盡しの、盡飯をすまされて後、しばらく語りて、歸られ、横川、伊藤、沖、吉原の四氏は、夕方迄、王と種々談ぜられ、三十日には、王の盡力にて乘り換への馬を求められ、かくて北京よりの密使を待ち居られぬ。

二　様々のたより

その雄々しさを偲びて、志士に關する日記を抄出せしかど、憚る所ありて、多くは省きつ、省きしは殊にすてがたき節々なるぞ憾みなる。

明治三十七年二月二十八日、空は晴れたれど、風ありて寒さは堪えがたかりき。例の事どもを終り、窓に倚りて、暮近き空を眺むるに、興安のあたり灰色の雲低う動きて、夜のカーテンは今其處より引かれんとす。鴉は聲も立てず飛び去つて痩枝吹く風肌さむし、故山の樣など思ひやりて、獨り自ら寂寞を慰むる折しも、突如として入り來れるボーイは、一個の包物に一封の狀を添へて差出し、今日支那人數多入府したるが、其中の若き一人より、これ先生に屆けよとて托されぬ。知り給へる方にや、と問ふ、何とはなく心急くまゝ、答もせで封押し開き、たゞ一息に讀み修れば、末には脇光三とぞ記されたる、君は、雪の蒙古に何せんとてか來給へる。……(中略)

喀喇沁へ立寄ることは途中にて申聞けられたる次第にて、御目にかゝり度などゝは夢にも思はざりき。若し〇〇にて知るを得たらむには何がな持參すべかりしを、殘念に存じ候。包の物は、蒙古の子供等に與へんとて用意いたした品に御座候。些少ながら生徒達へでも御分ち下され度、外聞を憚り候へば今晩は差控え明日參上御目にかゝるべく候。

とは、脇氏の手紙の後半なり。

今一行の見えらるゝ由はすでに知りつゝ心まちに待ち居たるなれば、駈けても行きまほしけれど、おのれも外聞を憚れば差控ふべく。

との意味にてかへりごとしぬ。

昨冬天津にて脇氏と相見し時、かく近き日に再び逢ふべしとは思ひもかけざりしを。我は只奇遇の喜ばしさに、明日の樂しみを參らせんとて錦繪花瓶など取り出て、よろづの室の飾りを純然たる日本風に取り繕いてありける折しも、志士等のリーダーの一人なる伊藤大尉は訪ひ來りて種々の打合事などあり。……

二十九日、伊藤、横川、吉原、沖、脇、等の人々來訪せらる。軍の事などくさ〳〵物語りありて後、やがて我も與りて評議の筵は開かれぬ。

今度入蒙せられし決死の志士は、總て十二人、半は〇〇〇〇へ半は〇〇〇〇へ赴かんとはしらるゝなり、いつれも皆我國の荆軻にして忠烈の氣天を貫き、殉國の心鬼神を泣かしむるものあり。諸氏が其任務を達せらるゝ日は、〇軍の心膽を寒からしむる時なり。我れは神かけて其成功を祈りぬ。

我れはかよわき女の身の力及ばねど、今此地にあるを幸ひ、聊にても諸氏の便を圖るを得ば、またこれ報國の一端なり。積雪の砂漠には道案内なかるべからず、百里の旅には馬を替へざるべからず、其馬其案内、平時ならば事はなけれども今の時いかにして之を求むべきか。〇は局外中立を守らざるべからず、加之〇〇内の官僚は、多く〇國に同情せるものを常ならば誰あやしむものなき事柄も、一舉一動監視せらるゝやうの心地するむづかしさよ。（我は如何なる役目を如何につとめたるかは今は記さず。）

今日王妃より大なる鮮魚賜りたるを、志士の君だちの首途祝きまゐらせんに、好き頭附きぞと思ひけるまゝ之を横川の君に進じ參らせしに、君は氷れる魚を横さまに抱へて立たれぬ。「喇嘛僧の御扮裝には似つかはしからず」といへば、「いづれ生臭なり」と笑ひつゝ答へて去りたまひぬ。

三月一日、大方のこと、まづは思ふまゝに整ひたれば。一日を急ぎ給ふ志士の君たち、明日は出立せんといはるゝに、心ばかりの事して、首途の祝酒まゐらせぬ。明日は劍を呑みて虎穴に入り給ふ君達の今日は何事も忘れたらむやうに打ちくつろぎて、母の膝に甘へる幼兒の如く、笑ひ興ぜられ、「故郷へ歸りたらん心地すなどいはるゝに、我れもいと嬉しく、風琴など奏でゝ興添へ參らしゝが、やがて一同の方々より、別れの挨拶せられし折は、胸つとふさがりて、とみに返事も出て來ぬを、やうやう涙のみて、「いさましき御歸りを祈りはべる」と僅に答へまつりぬ。

脇氏は一人殘られて、御身の上話いともこまゞゝと幼にして脇家に養はれ給ひし事より、今回北京を出て立たれしまでの事を語られ、さて「東京を出でし時、少しの手違ひにて父上に別辭申上ぐる機會を失ひしは、今になほ心にかゝりぬ」とて打ち沈まれぬ。「御心づかひもさる事ながら自分よりよきに申上ぐべければ、御心安う思されよ」と慰さめまゐらせしに、心よりうれしげにほゝゑまれぬ。

さるにても、我を姉とも思ひ給ひて、斯くは身の上の事こまゞゝと語られし御心

のいともうれしく、我も亦弟のやうに思はれて愛らしければ、靴下、肌着など、取り出でゝ参らせしに、こよなき嘘なりとて喜びて收められしが、石鹸のみは辭退し給ひ、「これにて磨かば、折角支那人に化けたる皮も剝げなん、よろづ汚なきこそよけれ」と戯言のやうにのたまひしが、我は御年の若きにも似ざる細かき御心づかひに感じ入りぬ。

暮雲簷に迫る頃、君は坐を立たれしが、「今は心にかゝる限もなく、身心共に輕きを覺えたり」とて、いと心地よげに別れを告げられたりき。

三月二日、けふ立たせ給はん筈の志士の君達は、尙さはる事ありて一日延べ給ふ。朝餉をへて後、故郷へものすべく、机に倚りて文認めてありしに紙は丈に及びて思ひは盡きず、筆をかざして躊躇すれば故郷の山川なつかしき父上、さては師の君友の俤髣髴として眼前に現はれぬ。夢か夢にあらず、うつゝかうつゝとも覺えず。

斯る時「河原先生……」と呼ぶ聲耳に入りぬ。顧みれど何物もあることなし、思ひなしにて、あらぬ聲を聞きけるよと思ひ、更に筆をつゞけんとすれば同じ聲はまた耳に入りぬ。こたびは稍高かりき。起ちて見れば窓外に人あり馬上の雄姿まがふべくもあらぬ、脇光三の君なりけり。急ぎ戸を排して請じまゐらせつゝ、いかなれば裏手よりは來給ひし」と問ふに、「現今の身の上ゆゑ人の思はくを憚りて」と答へらる。「さるにてもよくぞ路を知り給ひしよ」といへば、「昨日歸るさに、あのブランコを目標に見届けおきたり」と答へらる。

暮るゝまで故郷の事など語りあひ、いとも樂しかりき」といひて歸り給ひぬ。

今夕も亦、立ちたる方々と密議を凝らしぬ。

三月三日、後影にても見送りまゐらさん心積りにて、朝夙く起き出づ。窓尙暗う して雀の聲だに聞えぬに、諸士は既に夜深きに出て立たれぬと聞く。打ち見れど、空は低う密雲を凝め、風寒くして飛雪横に舞ふ。

其二

明治三十七年五月より、九月迄、我は、〇〇偵察の任務にあたりぬ。かくいへば、事大きく聞ゆれど、今其當時を回想すれば、よくも我身にしおほせしよと、自ら驚かるゝ節のみぞ多かる。偖て如何にして如何なる任務にあたりしかといふに志士の一人は、北京より、五日路なる熱河といふ所に、居られぬ。北京と此地との間には、電

信あれば、容易に通信せらる、これ即ち通信の起點、集中點なり。其地は、何れも南の方にあり、我は恰も中央に居りて其取りつぎをなせしなりき。其折の手紙の二三は、左に摘錄すべければ、それにつきて見らるゝも明かなる如く、全く、支那人の如くにして通信し居りたり。

（前略）六月三日、當地を發したる特使便は、熱河に於て、北京電報の返信を得、折り返し直ちに當地に到着すべき筈の所、十餘日を經る今日に至るもまだ何等の返信に接せず、毎日鶴首、待ち居申候。就ては萬一、貴王府へ、送信を依賴し、來り居る等の事も御座なきかと存候まゝ、貴姉の御許迄一寸御伺申上候條。御聞き合せの上、此使の者へ何等の御返事を給はり候はゞ、幸福の至りに御座候。先づは要用のみ、餘は後便に讓り申候。敬具

六月十五日夜　張生

沈　様

（前略）乍毎度御深切に滿ち〳〵たる御教示、難有奉感謝候。御願申上げたる件々夫々御配意を忝ふし、以御蔭、大なる利益を得申居候。此多大なる利益は、決して、小生一人に止まるものに無御座、又小生は最初より、此利益と貴姉の御勞苦に對する、忠實なる紹介者たらむことを、期しつゝあると同時に、平和の後、これ等の熱誠よりなる貴書が、〇〇セン史編纂委員の手に上れかし。多數の國民が貴姉に感謝するのゝどかなる日あれかしとの希望を抱くものに御座候。……

ヨコ川氏等以外の方々は、今に不明に御座候……伊トウ氏等は歸京後、すぐ或任ムのため、山海關方面へ出張せられたる由に御座候。北京より貴王へ何とか申來る迄は、御高見の如く、しらぬ〳〵を御續け居り下されたる方、可ならむかと存居申候。……

御申越の狀袋、數葉御送附申上候。當地は一萬戸に近かき、商業地としての漢人市街に御座候間、支那向きの御買物等も御座候はゞ、御遠慮なく御申越し下されれ度候。……

一昨日來着したる公報數十葉、貴覽に供し申候。公報は御燒棄下さるか、又は一經として可然御秘藏なしおき下されれ度候。……

有りあはせの藥品二三包、封入致置候。（下略）

（前略）毎度ながら詳細なる御通信に預り、且御慰めを忝ふし難有奉謝候。……貴所滞在中の外人に關する件、拜承仕候。其後も彼れの通信先及王との親交の程度等につき、御注意下され、又機も御座候はゞ、彼れの筆蹟、姓名等を書せしむるも、一策と存候。而して、此の如き場合に於て、彼れが、いはれなく、秘し去らんとするは、却て一の參考にもなるべき事と存候。「女學堂を參觀下されたる、當學堂名譽の紀念として學堂日誌に、國籍姓名等を記し奉らん抔、さわりなき、口實かと存候。」御對話は英語に御座候ひしや。……

北京便貴地着目取、其他に關する件、承知仕候。小生は、職局の最終迄は、此地附近に、駐在すべき事と存じ居申候。……アヽ多少の目的を果してヨコ川氏等の英魂を、慰むるは、夫れ、何れの日ぞ。……

ブビガク堂云々……定めし御困りの事もゐはずならむ、されど一時の事局大切なり、永遠なる貴姉の事業尚大切なり、貴姉が冷靜なる頭腦を以て此間に處せられ、名は顧問ならざるも一巾幗の身、能く王府内の重きをなし、ニホンの勢力を、事實に於て扶植せられつゝあるは、窃かに喜び居る所に御座候。「下略」

奥より來れる通信は、我手にて區分けをなし、熱河より電報すべきものは、それとし、北京迄持參せしむべきものは、それ〳〵使を馳せしむる樣機敏に事を運びぬ。殆んど身命を賭しての事業なればにや、思ひしよりも巧みに行はれし樣感じたり。又此間絶えず、〇國側の繩張りの妨けせしかば、先方にては、我國は蒙古に婦人を入れたりとて、非常に狡猾なる手段なりなど、罵りたる由なれど、我は、王室教育顧問の名にて、行きしとのことなれば、如何とも詮方ながりしものゝ如かりしも、先方より憎惡されしはいふ迄もなきことなり。されば我は、萬一のことありとも、〇人の手などにかゝりて、最後を遂げん心なく、美事自刎せん覺悟にて、國を去るにのぞみて、父より授けられし、懐劍は、寸時も身邊をはなすことなく、又護身用のピストルも常に身近く備へおけり。而して如何に、急に、變事生ずるも差支なき樣、常に荷物の整理迄して、表裏兩面の事業に心を碎きぬ。

其　三

三十七年の秋頃よりよく、王妃と共に、遠乘りを試みしが、それがため喀喇沁旗内の狀況に通ずることを得たり。或時、王、王妃にむかひ、百年の長計として由には樹

を植ゑ、野には柳を入れ給ひては如何にと勸め參らせしに、王の申されしには、我も貴國に赴き、視察してかへりしより、深く感じ居る所なれど、旗内には、さることに通ぜるものなく、さりとて貴國より、然るべき方を聘するは力及ばずと、しみ〳〵歎き給ひしかば。我は我が力の及ぶ限りは盡力いたすべければ、暫らく待たるべき樣申上げおきぬ。其冬王並びに王妃と共に出でし折、我は内田公使に向ふて、喀喇沁王、王妃の志ざし厚きを旗内の摸樣、王の考等を委しく、語り、さて、もし出來得べくば、外務省の方より然るべき方を、視察のため派遣し給はずや。さすれば王、王妃の滿足はいふ迄もなく、日本のためにも、少なからぬ利益あるべし、と願ひし所、公使には然りしか左程迄とは思はざりしに、さらば早速、外務の方にとて、盡力せられしかば、高橋工學士及び町田農學士の兩氏が、入蒙の上調査に、從事せらるゝことゝなりぬ。其結果たる極めて良好にして、王、王妃は非常に喜ばれ、日本の利益にもなりたるものゝ如し。兩學士の入蒙は、三十八年六月にして十一月に歸國せられしが、兩氏共報告書を闡製せられたるも、町田農學士の方は、秘密出版に附せられし由、洩れきゝぬ。

なほ志士の君達の時折につけ送られたる便の、いづれも疎かならぬもののみなれば、我は直ちに其の筋に送り屆けぬ。そが中の二三。

拜啓、酷寒の候愈御精勤の事奉大賀候。次に小生儀無恙頑健罷在候間乍他事御省慮被下度候。扨先達ては馬具類御送附被下正に落手仕り候。每々御手數の程奉深謝候。其前長谷部氏宛の分と共に芳書頂き候趣了承致候へ共掛違ひ未だ落手致不申御來示の趣如何哉存知不申掛念致居候。

今回、生儀幸に昇級の榮を荷ひ第〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇長仰付られ不日出發赴任致豫定に有之候。目下第〇〇〇は遼陽地方に〇〇致居申候。

貴姉に御依賴申上度件は生儀若職沒致候曉には蒙古喀喇沁に殘しおき候書籍其他若干の品物は若し王爺に於て必要と認めらるゝ品物例へば書籍等の如きものは王爺府へ寄附可仕不用の品は蒙古人に分與なし下さるなり御隨意に御處分なし被下度決して小生の遺族等に送附下さるの必要は無之候間左樣御承知の上可然御取斗被下度幾重にも願ひ上候。若し貴姉其内滿期歸朝被致候節は何卒其旨王爺へ御傳聲置被下度願ひ上候。王爺へ對しては生儀〇〇〇〇へ轉じたる旨

御話被下候て差支御座なく併し〇〇等は御秘し置被下度候。

生儀も戰爭終局後無事生存致居候へば是非再度入蒙致存念に有之候。過日錦州に於て長谷部氏携帶の御手にかけられし女生徒の編物細工一寸拜見仕り誠に短日月の間に蒙古人の手にて斯る立派なる製作品出來上り候とは只管驚歎の外御座なく、御苦心の程目に見へ、一同と共に感佩申上たることに御座候。

時下折角爲國家御自愛祈り上候。匆々

明治三十七年十二月十五日　伊藤柳太郎

河原操子様　侍史

拜啓、貴王府へ出張の際には種々御高配を忝ふし、且つ貴姉の御事業をまのあたり拜見するの榮を與へられけるを深く感謝致し居候。道中無事十月四日錦州に到着致し候間乍憚御安神被下度候。

戰況は其后御報知申上べき程の事無之候。併し二三日以來奉天方面に於て大戰開始せられ居る由なるも未だ何等の公報到着致し不申候。旅順は未だ陷落致し不申候。

御高説、女學堂の現況及び學生等の手になれるものゝ紹介などは一層各位の同情を得申候。御話の蒙古人等へ御分與の藥品に就ては〇〇へ御依頼申候處早速知己なる天津の〇〇〇〇へ申送られ別包の通り調達せられ候間其儘御送附申上候。日高氏への御贈り物に對しては厚く御禮申上呉れよとの事に御座候。

伊藤さんへの書物は慥に相渡し申候處丁度入用の際なりとの事にて大喜びに御座候。同氏及び井戸川さんよりも宜敷との事に御座候。

十月十三日

拜啓、其后御障りも無御座候哉御伺ひ申上候。小弟無異消陰罷在候間御休神被下度候。

此頃公務を兼ね北京、天津等へ出張し久振にて知己朋友等を訪ぬるの樂しき時を持ち申候。至る處貴姉の御事業に感服せざるもの無之候。何卒御邦家御自愛御攝養の程祈り上候。

小弟儀明日遼西の某地へ出發可致候自今の御通信は「營口〇〇〇〇〇〇〇〇殿宛にて御發送被下度候。

却説乍卒爾今回京都〇〇〇〇寺に屬せらるゝ升巴氏が蒙古の事情を研究し將來帝國勢力扶殖の基礎を定むるの目的を以て內蒙古方面に出張せられ當分赤峰市に滯在せらるゝ筈に御座候。就ては〇〇より相當の保護を受け居らるゝ義には御座候へ共萬事は便宜を與へられ候はゝ獨り同氏一人の幸福のみには非ずと存申候何分にも宜敷御願申上候

明治三十七年十二月一日

拜啓、皇軍破竹の勢を以て必勝必取誠に愉快此上もなき事柄にて御同然邦家の爲め大に賀する處に御座候。

此の勢なれば明年は彼れ等敵輩頭を垂れて哀を請ふに至るべきか何にせよ宣戰の御目的たる平和克復邦家百年の泰平を得んこと仰望此事に御座候。これ必來るべきの能事とも存候。

昨今の新聞にては遼陽の方面も都合よろしく殊に奉天、遼陽間の鐵橋及び鐵道線を第一軍に於て破壞し我等が敵の通路を絶ちし趣に有之また旅順の方も今少しにて手に入り候樣子に有之候。併し「ハルビン」乘取は明春に可有之か本年は奉天に冬籠りならんなどゝ小生等白眼者流は噂いたし居申候。扨貴嬢の御事業は如何定めて着々よき御運に至るならんと敬服の外無御座候。但し異鄉千里の客なれば御自愛なされて御壯健ならんことをのみ祈居申候。

さて又、橫川、沖兩氏のことは粗ぼ相分り候へ共外四名のことは更にわからず矢張親心にては眞相を知り得度と毎日それのみ待居申候。

一昨日は〇〇〇の某小生不在の折訪問せられ橫川省三氏最後の折の手紙が〇〇へ到着せし旨申聞候へ共小生に逢はざる故只左樣申候まてにて歸られ候由に付昨日此方より其人を訪ひ候へ共馳け違ひ面會不則今より又訪問可申心組に御座候。（下略）

明治三十七年八月廿九日　淺岡一

河原操子樣

其後は打絕え御無沙汰を申上居候處。

先生には御障りもあらせられずます〳〵御壯健に渡らせられ候よし、まことに何よりと、かげながら御喜び申上居り候。次に私方にても祖母はじめ皆々變りな

く過し居申候間憚ながら御心安う思召被下度候。

扨過日は御細々との御親切なる御文たまはり皆々にて拜見いたし涙にむせび入り申候。兄事先生の厚き御心盡しに預りさだめし家に歸りし心地いたし候事と存候。御地を出發致し候砌に御手數戴きたる兄より私への手紙の内にも先生は光三の姉上の如く光三はまた弟の如き心地すなどと此上なく喜び、私より吳々も御願申上くれよと申まゐり候。實に〳〵先生には一方ならぬ御世話戴き候ほど誠にありがたく何とも御禮の申上樣も御座なく、何れ御目もじの折に山々御禮申上度と存居候へ共、とりあへず手紙にて思ふ一はしを申上候。

まことに戰國のならひとて親を失ひ、子を失ふもの數多御座候事とて兄の今度の事業も國家の爲に候へば決して死を厭ふ如き心は、つゆ御座なく候へ共、未だ生か死か判然致さずに相成居候まゝ何卒確かなる所をきかまほしく、皆々それのみ願ひ居次第に御座候。

家内一同より吳々もよろしく御願申上る樣申出てゝ何卒充分に御身體を御いとひ遊ばして無事御歸朝の日を今より御待ち申上居候。

明治三十七年八月三十一日

河原先生御まへに

淺岡和歌

三　入京の記

王府にては十月(明治三十七年)の末つ頃より、參勤の用意とて、王御夫婦を始め下皆其れ〳〵の心遣ひと忙しさとはなか〳〵に由々しきものなりき。

十二月の初旬に漸く用意整ひ其月の十三日、道中の調度を遣して、其他の進物、雜式を先きだちて北京へ送らる、其車總て十臺、車は我大八車樣の大形のものにして、之に堆きまで積み上げ、十頭乃至十二三頭の牛、馬をして牽かしむ。此荷車が北京へ達する日數は約三十日にして、一臺の運賃三百圓を下らずと聞きぬ。それより漫ろなる十日を過して、二十四日、王の御一行と共に入京すべく喀喇沁を出立しぬ。

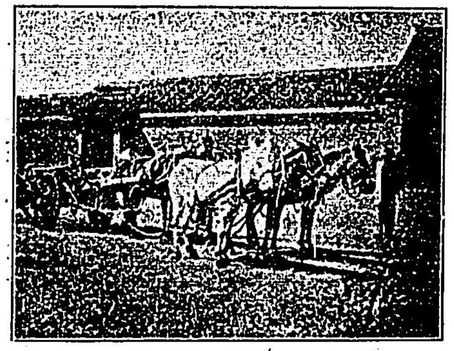
太福晉(先王の妃)老太太(現王の御生母)にして先王の第一側室)を始めとして、二老太太(王妹の御生母にして先王第二の側室)王、王妃、は駱駝轎に召し給へり。太福晉と福晉の轎は紅き絹もて覆はれ、四隅に垂れたるふさも紅くいと榮えたるものな

るが、こは親王家より降嫁ありたる方々に、特に朝廷より許されたるなりとぞ。

王は郡王の格式ある轎に召されぬ。我も王妃より賜ひし駱駝轎に乘りぬ。王妹と王女とは朱塗りの支那馬車に召させられ他の人々は普通の支那馬車なりき。かくて警護の兵士、近侍從者數百五六十名馬の數二百五六十頭と註せられぬ。此大袈裟なる參勤は、一回約二萬兩の費用を要すといふ。德川幕府の參勤制度にも似て清朝が如何に蒙古を忌憚し、如何に壓迫し如何に躬縮するか。其一班を知るに足りなんか。

王府より上瓦房(シャンワンファン)まで、十清里、可憐なる六十餘名の少女は。我等を送りて此に至りぬ。駒を止め、轎を下りて別を告ぐ、乃ち陽關の曲は歌はずとも、彼等の顏には、無言の哀歌あり。無聲の悲曲の閃くあり、眼を擧ぐれば、彼の山も別を惜むが如く、路の楊も袂を引くに似たり。我胸獨り痛なからずや、生徒は右より左より、前より後より、我を取り卷き、袖に縋り、袂を抽きて、齊しく涙に咽び、中に歔泣せるもあり。いざさらばと袂を分ちて、彼等はうるみし聲にて「先生早く歸つて下さい」といふ。我は頷きしのみ、胸塞がりて言はんやうなかりき。

風は吹かず、雪は降らず、氣候もさまで寒からず、時には小春日の長閑さを見れど、冬は冬なり、茫漠たる山間の惡路、河中の難道など總て三十六年の十二月に見し所と多く異らず。今は多く記すべきこともなきまゝ、旅舍の事ども其一二を左に記さん。王の投宿せらるゝにも、旅舍はさしたる用意もなさず、蜘蛛の巣の依然としてある所も多ければ、旅舍に着する前七八清里が程より、從者四五人、騎馬にて駈付け、王、王妃の室を始め太福晉、老太太方各位の室へ、日本の蚊帳に似て、一方を拂ひたる垂帳を吊り、其開きたる方を土間に向けて、出入に便にし、室內へは布を敷きて、兎に角、小ぢんまりとせし室を、俄拵へにしつらふなり。扨御着になれば、先着の侍女等「チリハラヒ」を持ちて出で迎へ、時によれば衣の地色もわからぬまでに掩へる「チリ」をうちはらひ、さて室に請じ參らす、室に入り給へば直に洗面盥嗽され、王、王妃は、太福晉の許へ御機嫌伺ひに參らる。



蒙古の貨物車

それより喫茶、食事、就寢、整裝、皆其一室にてなさる、寢具は、固より携帶のものなるが、蒲團、毛布を程よく、疊み、糠枕を心となし厚き風呂敷にて、蓆にても捲くがやうにくる〳〵と包みて、其上を革紐にて留め延ふるも、收むるも甚だ手輕く、用意せられてあり。

食物は大概出發前に調理して、罐詰となして携へ、各驛につきたる時は、旅舍にて之を溫めて用ゐらるゝが、野菜肉類の新らしきものある驛にては、そを求めて調理せしめらる。朝は結髮の後、茶と菓子とを食して、朝飯を取らず、總て二食なり。

喫茶終り、出發間近かになりたる時は、王、王妃は例の通り、太福晉に請安に向かはる。

何れの宿にても、自分は王妃と寢を同ふし、夜具を接して寢ねしが、或る宿りにてありき。夜深けしに頻りに我袖を引くものあり、驚きて目覺むれば、王妃の我を探り給ふにてありき。何事の候にかと問ひ參らせば、寒さに堪え難く得睡られずと、のたまふものから、互に手をとりて語らひしが、いつか其まゝ睡に入り。明る朝目さめて打笑ひたることもありき。

途上にて憐れと見しは、沿道の土人なり。彼等は、手の附きたる笊と、長き柄を附けたる杓子樣のものを持ちて、一行の後を追ひ來り、馬糞を拾はんと、互に競ひ、互に葬めけり。乾して燃料となさむ爲なり、彼等は馬を驚かして、馬夫に叱せらるゝもあれど、黃金の珠玉にても拾はんかの勢にて、屈せず、慕ひ來りぬ。拾てゝ糞の如しといへる語は、此には其意味の適切を欠くと思ひぬ。

一月一日北京城を望みし時。其日午後四時、我公使館に着して、日本語にて、思ふまゝに語りし時の喜ばしさ、樂しさは、今はなか〳〵筆も及ばずなむ。

第十一章　蒙古の地勢及び風俗（漢蒙、の書による）

一　位置（分界、廣袤、人口、）

蒙古は、支那本部の北に位し、其地形東西に廣く、南北に狹く、北緯凡そ三十七度なる甘肅省（カンスロンロンウェイシェン）衛縣の西南黃河（ホワンホー）の北岸に起り、五十二度十分なる、貝克穆河（ベイクムホー）の北水源に至り、東經は凡そ八十六度なる齋桑湖（ナセイハンホー）の東部より始まり、百二十七度の呼蘭河（ホランホー）の烏蘇里江（ウスリチャン）の會合點に終る（青海（チンハイ）を除く）其分界北は阿爾泰（アルタイ）山脈を以て露領西比利亞（シベリア）に接

し、南は長城を限りて支那本部に界し、東は嫩江水域を以て滿洲に界し、西は甘爾省及び伊犂に接す。其面積は大略二十四萬八千四十方里なれども、其人口は僅かに東京、大坂を合せたる數に過ぎずといふ。これ畢竟氣候の寒冷なると、耕作に不適當なる地の多きにあるものならん。

二　地勢

(1)山脈、蒙古の山脈は、山勢概ね西南より東北に向つて奔馳する二大山を以て其地勢を形成せり。即ち一は崑崙山脈にして西南より東に亘り他は阿爾泰山脈にして西より北に走れり、其大なるものは崑崙山脈に於て祁連山、阿拉善山、陰山、興安嶺とし、阿爾泰山脈に於ては、唐努山、杭愛山、肯特山等とす。又西北に於て清露の疆界線をなすものを薩彦山脈とす。

(2)河流、蒙古には、河流の大なるもの甚だ少く舟楫の便あるものは東部及び西北部にあり。其中最も流域の大なるは、色楞格河(北部の諸水を集め西比利亞に入り貝加爾湖に注ぐ)にして克魯倫(東北流して西比利亞の境に入り終に黑龍江に入る)西遼河、喀木河、札克干河等これに亞ぐ「西遼河は一名西喇木倫河といひ、內蒙古中の巨川なり。又東遼河は一名赫爾蘇河といひ、內蒙古に於て西遼河に亞ぐものなり。此二河は內蒙古の東部に於て相合し、滿洲に入りて遼東河と稱し、諸川を合し南流して牛莊の西を過ぎて遼東灣に注ぐなり、」國の中央より西南部は渺茫たる沙漠にして多少の細流なきにあらずと雖、或は潴して澤となり、或は沙に乾涸するのみ。有名なる黃河は界內の南部を經過せり。

(3)湖澤、河流の少なきに比すれば、湖澤には甚だ富めり。而して其大なるもの多くは西北部にあり。即ち青海部の青海、科布多の烏布薩湖、伊克阿拉克湖、奇勒稽思湖、又塘努烏梁海旗に在る庫蘇古爾湖等とし。東南部には陰山及び興安嶺山脈より泉流潴して小湖となるものは其數枚舉に遑あらず、又鹽湖は沙漠以南所々にありて、阿拉善部及び青海和碩特部に在るもの最も大なり。

(4)沙漠、沙漠は殆んど全土の三分の一を占め、即ち東部より斜めに西南部に亘れる中央の地域にして、北緯凡そ三十七度なる黃河の北岸より起り、四十八度なる外蒙古の庫倫に至り、東經凡そ百度より起り百十七度なる滿蒙の交界に跨れる貝爾

諸爾に終り、海面を拔くこと凡そ四千尺東西は凡そ五百里に達し。南北は二百里乃至二百七八十里に至る(沙漠は蒙古語にて戈壁といひ、漢人は之を瀚海と稱せり)地勢は概ね平坦にして、一望渺漠として際りなく丘陵聯綿として起伏し宛も大洋中に島嶼あるが如し。其間鹽湖、潴澤、所々に散在すれども沙漠の中央部にありては、數百里の間全く一の水流なく、夏日大雨の後と雖も土地乾燥せるがため僅かに數時間にして乾涸するに至る、氣候は夏日は炎熱燬くが如く又冬期は亟寒凜冽にして膚を裂くが如し。且つ秋冬の間强風吹てやまず、沙石を揚げ草木を拔くが故に大樹を生ぜずと雖も低窪の地には一種の剛强なる草類を叢生じ其の高さ四五尺に達すといふ。沙漠の東南部は沙土相混し草木繁茂して耕耘に適すれども、中央部は耕耘に堪えざるのみならず、水流に乏しきが爲め全く不毛に屬す。然れども張家口(ケイロン)より庫倫に達する沙漠間の道路は驛站の設け井水の備ありて隊商常に陸續たり。土人は道路に沿ひ各々部落を作り專ら牧畜を業とせり。又隊商の駱駝に芻草を給し或は薪炭に代用すべき獸糞を賣りて生計を營むものあり。沙漠中の亟なる禽獸は、沙雉、雲雀、鴉、麋鹿、等なり。

三　氣候

氣候は、土地によりて差異ありと雖も蒙古は、其位置稍々偏北の緯線上にあるを以て、夏期は太陽光線を直射して炎熱燬くが如く、又廣漠たる平原は溫氣を放散し易きを以て冬時は寒嚴を來たす。加ふるに土地概ね高原なるを以て、支那本土に比して氣候の差異亦た著し終歲風多く殊に秋冬の間は北西の風多く沙漠の高原に於て最も甚だしとす。其風の起るに當りては草木を捲き沙礫を飛し、天日を遮蔽し白晝ために晦冥となり咫尺を辨ぜざるに至る。氣候の變化は春季最も甚だし。降雨は七八の間に多く冬季は雨なく屢々降雪あり、氣候の變化は大體に於て前述の如くなれども山脈の向背と土地の高低により一小部分内に於て激變ある ことあり。然れども支那本部に接近せる地方は、沙漠高原地方の如く、其變化激烈ならざるなり。

四　物産

蒙古は前述の如く其三分の一は河流少なき沙漠地にして耕作にも、漁獵にも適せざるを以て、土人等は專ら牧畜を業となせるが故に、物産の重なるものは、家畜及び其産品にして農産物は極めて少し。唯だ直隸省に屬する蒙古部に於ては現今主として農業を營むを以て各種の穀類、蔬菜及び菓物等を多く産するを見る。樹木は、松、柏、椿、樺、樅、楊、柳、の數種に過ぎず。花卉類は野生頗る多けれども、人目を喜ばすに足るものは少し、然れども其色著しく鮮麗なるは空氣の乾燥なるによるものなるべし。藥草又多し、野獸には、虎、豹、熊、鹿、狐、兎、狸、獺、鼠、野馬、の類を産し殊に麋鹿、羚羊、山羊の種類甚だ多く土人は此等を獵して毛皮を輸出す。而して家畜には、馬、牛、羊、山羊、駱駝、犛牛、を以て最とし、騾、驢、豚等之れに亞ぐ、これ即ち蒙古物産の主なるものなり。

五　風俗

蒙古の人種は、大略喀爾喀、加爾瑪克、烏梁海、唐古特、東干の五種に分つ、其中喀爾喀人種最も多くして殆んど其三分の二を占む、喀爾喀種族は往昔成吉斯汗に從ひ大に威武を顯はしたる人種にして、自身强壯勇悍にして、質朴の風あり。外蒙古に居住して游牧を事とす、又內蒙古に於ては支那本部に接近する地方に多數の漢人種栖息して村落を設け耕作、礦業等に從事するを以て、蒙古人は其感化を受けて質朴の風習は消失せるが如し。

言語、は自ら一國の語をなせども、大約三種に區別す。蒙古、本部語、撙蠟的語、及び加爾瑪克語即ちこれなり、然れども諸汗王以下酋長及び其子弟は北京官話を學び、又支那本部に接近せる地方に於ては各階級の蒙古人能く支那語に通ず。

衣服、は北京邊と大同小異にして、主として棉布を用ひ絹布は富者に限れり。而して冬時は羊裘を着す、蒙古人の衣服は一衣萬用ともいふべく、時としては布巾、手拭の代として物を拭ひ或時は風呂敷の代用として其裾を折りかへし、こゝに物を入れて運搬するなど國の風とはいへ外國人たる我等の眼には實に異樣に映ずるなり。若し日本に於てかゝることをなさば直に狂人と呼ばれんも、淸潔といふ觀念を缺ける彼等より見る時は、何故、日本人は布巾、手拭、雜巾或は風呂敷など、面倒に區別しおくものにやと却つて不思議に思ふことならん、加之蒙古人は水を用ひ

てものを清潔になすことをせぬ人種にして其の衣服なども始めより破るゝに至る迄洗濯をなさずして其まゝ用ふるにより、汚れ垢つき色あせたる樣はたとへん言葉もなき迄に覺ゆ。

頭部、男子は喇嘛僧を除くの外は皆支那人と同じく辮髮を蓄へ、又女子は北京に近き地方は滿洲婦人と同じく長き弁をさしこれに中央より左右に分けたる髮を巧に卷きつけ、紅、桃色等の大きなる花簪三四本を其兩側にさし、はてやかに飾り居れども、一般には中央より左右に垂れて辮髮となし、富者は、これに金、銀環を付し又は珊瑚、眞珠等を飾る者も多しといふ。

食物、日常の食物は獸肉、麵、粟、黍、酥酪等にして飲料は牛乳、磚茶、燒酎等なり。就中最も嗜好するものは磚茶にして貴重すること恰も貨幣の如く時々は其代用となすことあり。肉類にては羊肉最も稱美せられ魚肉は餘り嗜好せず、而して野菜は內地に進むに從ひて極めて少く、外國人の蒙古內地を旅行するものをして最も困難を感ぜしむるも此點にありとぞ。

家屋、は一般には極めて粗なる土屋なれども富豪の家は支那本部と異らず、而して何れも其內部の構造は室內に坑を設くる等總て寒國的なり。然れども內蒙古の北方より外蒙古に至る時は、皆張幕に住みて游牧を事とし水草を逐ふて移轉し容易なる沙漠的構造にして、徑寸餘の木竿の兩面を削りて平かにし互に組み合せて網目の格子の如くにし其合せ目は細き牛羊皮を以てし決して釘を用ふることなきが故に、其格子は伸縮自在にしてこれを縮むれば橫に幅廣くなり、伸ばせば其丈長くなる。かくて其の格子五六枚を緊ぎ合せて、地上に圓形の垣を造り、其上を蓋ふに、丁度傘の骨の如き木竿の其一端は圓環につなぎて開閉の自在なる屋根を以てし、之を包むに羊毛を固めて製したる毡布を用ふるなり。かくて其屋根の中央なる即ち傘の轆轤に當れる部分は窓にして、これ又開閉自在なり。而も室の中には爐を設け、牛馬の糞を燃料として暖をとり或はものを煮る所多しといふ。

游牧民は此西部にありと雖も全土概ね此の種族にして男女共に騎馬を好み家居は帳幕を用ひ遷移するを常とす。所謂水草を逐ふ者にして地に定居なく冬季は居を山谷に移して以て寒烈を避く、氣質朴實なれども性質は懶惰にして進取の氣力に乏し、これ游牧生活の然らしむる所にして、生存競爭の顧慮するものなけれ

ばなり。牧養の術は甚だ巧にして男子專ら之に當り婦女子は帳幕内にありて酥酪(ロ)黄油(タ)を製し或は炊事をなす。然れども若し必要ある時は直に馬に跨りて男子を幇助す。

彼等は男女共妙齡の時代には婉美にして、怜悧なるも年齡長ずるに從ひ容姿頓に衰ふ。嫁娶は媒介者あり、又結納ありて婿家は家畜、金圓、衣服を新婦の父母に贈る、富者は往々巨額の贈物をなすことあり。婦家は家具、帳幕を贈るを例とす、而して離婚再婚共に隨意なり。親族間には父系を尊び女系を輕するの風あり、夫婦は家内にありては同權にして家外の事は夫の意思に任せて容喙せず。又男子には正妻の外に妾を置きて一家に同居せしむることを得れど家政は正妻の管理する處とす、又生子も嫡庶の別ありて相續の權は嫡子にあり。

娯樂は甚だ少なく競馬、唱歌は其主なるものにして樂器は笛及び絃の二種に過ぎず。神佛を敬し山川鳥獸を祭り日月星辰を祈ること甚だしく吉凶禍福天變地異擧て神佛の意に出づるとなし。現世の幸福死後の冥福、疾病の平癒皆幇助を神佛に需めざるなく鍼藥醫治は毫も容るゝの餘地なきなり。喇嘛教は彼等の妄信する所にして上は王公より下賤民に至る迄之を奉ずること甚だ厚く一家に男子三人あれば其一人は必ず喇嘛僧となす。故に喇嘛廟は蒙古の偉觀にして到る處の都市村落に於て宏大なる建物は必ず喇嘛廟となす。而して佛を信ずるの餘終に殺生を以て惡行となすに至れり。

蒙人は禮儀の民にして、甚だ簡略なりと雖も主客互に口儀を述べ家畜の安否を問ひ送迎の禮あり。途中人に遇ふ時は各々携ふる所の鼻烟を出し相供するを禮とし又知己の長者に逢ふ時は必ず馬を下りて拜するなり。

六　政體

蒙古は、元の後裔各々一隅に割據し彼此統屬せずして恰も一小國の體裁をなせしが、清朝の之を服して藩屬となすに及び疆界を正し邦土を分ちこれに施すに武治を以てし、各處の要地に城塞を築き、將軍、大臣、都統等の諸官を派駐し、政府に理藩院を置き、理藩院則例を設け其の政令一に理藩院をして管理せしむ、故に今や蒙古は清朝の正朔を奉じ其版圖に隸するものにして之を外藩といふ。行政區劃を分

ちて四大部とす、即ち內蒙古、外蒙古、青海蒙古及び內外蒙古の間に散在する遊牧部にして、皇帝の直轄に屬し之を內屬遊牧部といふ。更に之を別ちて部となし、又之を小別して旗と稱す、旗の名稱は種々なれども部名の下に左翼、右翼、中旗等の別を用ふるもの最も多し、每旗には酋長ありて一國に君臨し、生殺與奪の權を擅にして部下を統御するに專制を以てせり。然れども內屬遊牧部には酋長をおかず。

清國の外藩蒙古を服從する政略は主として喇嘛敎にあり。蓋し土地廣大、人民慓悍にして武力を以て制御し易からざるにより人民の崇信する喇嘛敎を厚待保護して民心を撫綏し殺生を戒禁せる敎旨は、遂に蒙古人を化して平和溫順の民となすに至れるなり。

蒙古の官制は每旗に長をおきこれを扎薩克といふ、酋長を以てこれに充つ支那政府より奉ずる所の官職にして或は世襲なるあり、或は任命するものあり、一旗の政令を掌る其職權甚だ大なり。旗にして扎薩克なきものは將軍、都統若くは大臣之を統治す、扎薩克の下に協理臺吉を置きて補佐せしめ其僚屬に章京、副章京、參領佐領、驍騎校ありて旗務を分掌す。

蒙古にては、數部數旗、或は一部數旗を併せて盟と稱す。每盟に盟長及び副盟長各々一人を設け盟內の札薩克を以て任命す、斯くて各旗は期を定めて其盟長の所在地に會集す、これを會盟といふ即ち盟を分つこと左の如し。

內蒙古東四盟

第一、哲里木盟
- 科爾沁部（六旗）
- 杜爾伯特部（一旗）
- 札賚特部（一旗）
- 郭爾羅斯部（二旗）

第二、卓索圖盟
- 喀喇沁部（三旗）
- 土默特部（二旗）
- 敖漢部（一旗）
- 奈曼部（一旗）
- 巴林部（二旗）
- 札爾特部（二旗）

第三、照烏達盟
- 阿魯科爾沁部（二旗）
- 翁牛特部（二旗）
- 克什克騰部（一旗）
- 喀爾喀左翼部（一旗）
- 烏珠穆沁部（二旗）
- 浩齊特部（二旗）

第四、錫林郭勒盟
- 蘇尼特部（二旗）
- 阿巴哈納爾部（二旗）
- 阿巴噶部（二旗）

内蒙古西二盟

第五、烏蘭察布盟（四子部落部（一旗）　毛明安部（一旗）　烏喇忒部（三旗）　喀爾喀右翼旗（一旗））

第六、伊克昭盟（鄂爾多斯部（七旗））

以上六盟の外歸化城土默特部は將軍、都統及び各廳の同知に隷するを以て札薩克を設けず。其會盟は本城に集まり盟長を設けざるなり。

外蒙古喀爾喀四盟

第一、罕阿林盟（土謝圖汗部（二十旗））

第二、巴爾和屯盟（車臣汗部（二十三旗））

第三、畢都里雅盟（扎薩克圖汗部（十八旗））

第四、齊爾里克盟（三音諾顏部（二十二旗））

外蒙古杜爾伯特部二盟

第一、賽因濟雅哈圖盟（杜爾伯特左翼（十一旗）　輝特下前旗（一旗））

第二、賽因濟雅哈圖盟（杜爾伯特右翼（三旗）　輝特下後旗（一旗））

土爾扈特部五盟

第一、南烏納恩素珠克圖盟（土爾扈特（四旗））

第二、北烏納恩素珠克圖盟（土爾扈特（三旗））

第三、東烏納恩素珠克圖盟（土爾扈特（二旗））

第四、西烏納恩素珠克圖盟（土爾扈特（一旗））

第五、青塞特奇勒圖盟（新土爾扈特（二旗））

和碩特一盟

巴圖賽特奇勒圖盟（和碩特（三旗））

清國皇帝は蒙古に對して封爵の制を設け勳戚忠勤の等差によりて、これを封じ世襲を得せしむ、其爵を分ちて六等となす、即ち親王、郡王、貝勒、貝子、鎮國公、及び輔國公これなり。外蒙古には以上六等の外親王の上位に汗爵ありとぞ。

内外蒙古の王公、西藏の喇嘛等は或は毎年或は數年一回朝貢の義務あり。而し

て其貢物の種類は一定の規則ありて任意に變更することを許さず。又朝貢は例規によりて必ず來朝すべき者と、奏請して許可を得て始めて來朝するを得る者との別あり。都爾伯特(トルベト)、西藏は則後者に屬するなり。但し貢物は凡て必ず時を以てこれを獻ずることは他の王公と異ることなし。

七　宗教

蒙古の宗教中最も盛に行はるゝものは喇嘛教にして、崇信甚だ厚く支那政府は之を以て政略の一方便となすが故に、保護極めて厚く邊疆の寧靜を得るもの其力に依らずんばあらず、其他回教、耶蘇教、希臘教等ありて布教に盡力しつゝあれども未だ旺盛ならず。

喇嘛教は佛教にして二派あり、一を紅教といひ、一を黄教といふ。其蒙古に行はるゝは黄教を以て盛なりとす。二教は原より一源にして初め其僧皆印度袈裟の舊式に則とり紅綺の禪衣を服す紅教の名蓋しこれより起れり。黄教は西藏の僧宗喀巴(ツンカバ)より初まる、宗喀巴初め紅教を習ひしが、其徒戒規を守らず、佛教の眞意を失ひ人心を蠱惑するを見て、改革の必要を感じ即ち徒衆を會し自から其衣冠を黄にし、以て別に一派を立て二大弟子に遺囑し世々呼畢勒罕(ホビロハン)(化身の意)を以て轉生し大乘教を演へしむ、これ即ち黄教の祖師なり。爾來其教大に擴充し蒙古に入りて今日の盛をなすに至れりとぞ、二大弟子は一を達賴喇嘛(ダライラマ)といひ一を班禪額爾德尼(パンチャンエルトニ)といふ。皆死して神通を失はず自から轉生する所を指示すとなす。こゝに於て弟子輙ち訪求してこれを迎立す、爾後常に輪回し易世互に轉生して其教法を維持するものとす。達賴喇嘛は西藏の布達拉(ブダラ)に居り、班禪額爾德尼は同國の扎什倫布(チャーシーロンブ)に居るといふ。

蒙古には各部至る所に喇嘛廟ありて、上王公より下野民に至るまで一般に奉信し、吉凶禍福皆これに依賴し疾病あるも醫藥を用ひず、僧を請じて全癒を祈り時に一家の財産を擧て喇嘛に寄する者もありといふ。

喇嘛教は支那政府も亦これを厚待し、蒙古人を奬勵して信徒となし務めて保護を加へたる結果は終に慓悍を抑へて怠惰に歸せしめ、滋生を妨げて衰弱に至らしめたるなり。今日蒙古諸部に於て人口繁殖せず。荒涼無人の地たらしむるもの

其源因一つに茲に存す、此の如く清廷の外藩を微弱ならしむるは、當時に於ては內訌を禦ぐの術たりしならむも、今や却つて外侮を招くの媒となれるなり。

（元來喇嘛なる語は、西藏語にして優者を意味し、梵語のウッタラに相當し、喇嘛の僧正にのみ限られたる稱呼なりしが、尊敬の意より遂に一般ラマ僧の稱として用ひらるゝに至れり。其教をラマ教と稱するは外間の稱呼にして、ラマ僧自身は單に佛教、又は佛陀の教と稱し決してラマ教とは呼ばざるなりとぞ。）

八　教育

蒙古人は男女少壯より遊牧を事とし、絶て教育を施すことなし。されば彼等は教育の何物たるを知らず、人智開けず、教化行はれず、依然として太古草味の民たるを免れざるなり。各部酋長の所在地には時に學校の設なきにしもあらざれども、たゞ支那、滿洲、蒙古等の語學を教授するに過ぎざるなり。

九　道路

蒙古より支那本部に至るには、總て喜峯口（シーフオンコウ）（最東）古北口（クーペーコウ）張家口（チヤンカーコウ）、獨石口（トーシーコウ）（最西）の四口によりてなす、此四口は萬里の長城に設けられたる關門なり。右の道路は康熙（カンシー）三十一年に各部落の遠近を量り定められたるものにして、進貢朝勤皆此道に依れるなり。

一〇　蒙古の通貨

蒙古には古來より通貨なきを以て、商業上最も不便多しと雖も、土人は物品交換を以て習慣となすが故に未だ通貨の功用を知らざる地方多しといふ。然れども支那銀兩は全土に通用し、又支那本土に近き地方には鐵錢流通す、其他商店等にては票を發行して或區域を限りて盛に通用せり。而して露西亞との貿易市場には、露國紙幣及び露普爾（ルーブル）貨通用するといへり、其ほか全土に最も能く流通し殆んど物價の本位とも稱すべきものは磚茶にして、往々小片となして使用するに至る、故に恰克圖（キヤクト）にては磚茶の相場は常に壺一の價を有するといふ。然れども直隸省所屬の蒙古部に至りては內地と毫も異なる處なしとぞ。

一一　都會

庫倫、は外蒙古北部の一都府にして土謝圖汗に屬す。市街を分て蒙古區及び支那區とす、人口凡そ三萬、其大半は喇嘛僧徒なりといふ。露西亞の領事館こゝにあり。又蒙口區には巨大なる圓形の佛堂あり、結構壯麗、金色燦爛として人目を眩惑す。又喇嘛胡土克圖の宮殿あり、其華美壯大なり。こは西藏の拉薩につぐの靈地として毎年夏期には禮拜するもの輻奏して熱鬧を極むといふ。

烏里雅蘇臺　は、三音諾顏部にあり。蒙古西北部の一都府にして人口凡そ三千餘城郭ありて、定邊左副將軍駐紮す。

科布多城　は、蒙古西北部の一都市にして、人口凡そ三千餘、城郭あり、參贊大臣駐劄す。

多倫諾爾　は、一に喇嘛廟と名づく、北緯四十二度十六分にありて、原とは內蒙古なりしが現今は直隸省に編入せり。漢蒙雜居して家屋櫛比し商賈雲集し、蒙古東南部の一都會なり。市街は支那、蒙古の二部に區劃し南北五里東西三里壯嚴華麗なる佛堂、寺院、多し喇嘛僧常に二千餘名へ及べりといふ。貿易甚だ旺盛にして商賈殆んど一千餘戶、盛大なるは馬市にして又銅鐵の製品多し、佛像最も著名なり。鐵材は山西省平定州より輸入すといふ。

定遠營　は、阿拉善厄魯特部の一府にして阿拉善親王の居城たり、城外戶數五六百にして食鹽、駱駝、山羊等を出す。

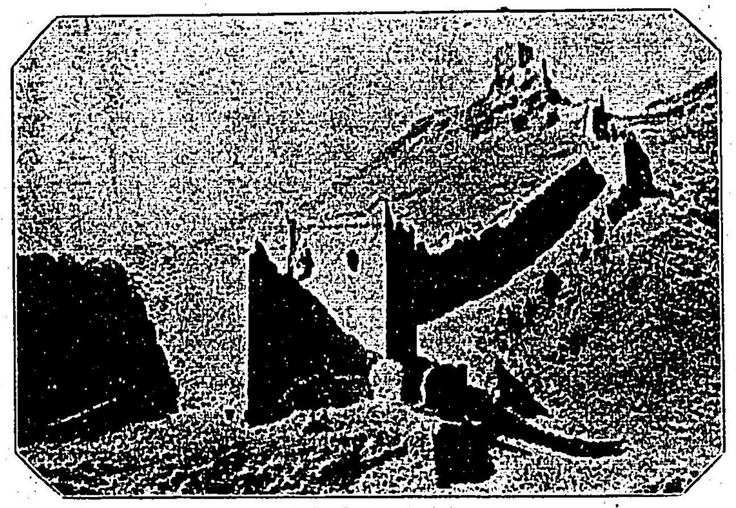
買賣城　は、清露の境界にある一都會にして、庫倫を距る八十里陸地貿易の要地たり。人口三千に過ぎざるも市街は稍々繁榮にして貿易は茶を以て主となす。

歸化城　は、土人これを庫々和屯と稱す、歸化城の名は往昔順義王俺答といへる人此地に居り明朝に歸順せしに起れりといふ。鄂爾多斯旗界の黃河河套の東北にありて南殺虎口を距る三十里蒙南部の一都會にして、人口凡そ三萬とす、城郭あり。交通頗る頻繁なり、市街を旅人、喇嘛、商賈の三區に分劃せり物產は家畜を主としこれにつぐを毛綱、油、大理石細工、製皮、氈毯等とす。

第十二章　歸朝日記

一　戰爭の終局

明治三十六年十二月、蒙古開發の目的を以て入蒙せしより、早くも二星霜は過ぎて、三十九年一月とはなりぬ。我が身の喀喇沁王室の敎育顧問として、果してよく內外の所期を達せしか、甚だ疑はし。されど只我は、我身の最善をつくして、蒙古の子女に接し、其土民を遇し、其王、王妃に交はれり。王、王妃は、身にあまる光榮と感ずるまで、我を信任され、其子女はわれを師として尊敬し、衷心我に懷き、其土民は、我を異邦の人と見ずして親めり。あゝ人誰れか其所期の成功の曙光を見て、手を額にせざるものあらん。又誰れかそれに奮勵せられて、黽勉努力せざるものあらむ、我は、王妃が屢々、先生どうぞ蒙古の人になつて下さい、との難有詞を給ふ毎に、知己の言として、血の漲るを覺えざることなかりき。これより先き、三十七年の暮より、三十八年の春にかけて、入京せる砌、しきりに歸朝を勸められしが、我は、事を中途にして廢するに忍びず、未だ充分基礎の強固ならざる事業を打ち棄て、興望にそむきて、



山海關萬里の長城

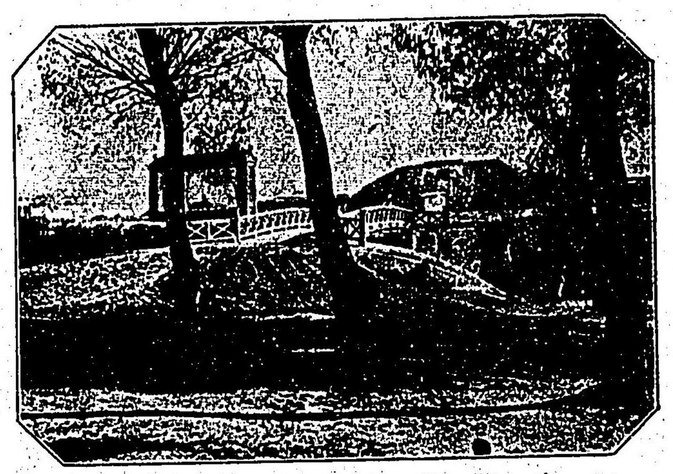
身獨りの都合のため、歸朝せんは思ひもよらず。我は、我が企てし事の確固たる基礎を得んまで、引きかへして其事に從ひたしとのべ、好意を謝して、辭退しぬ。かくて再び入蒙して、三十八年の暮迄には、兎に角事業は一段落を告ぐるまでに進行せしむるを得たり。折しも日露の媾和も締結せられ、諸事其終りを告げたれば、我は獨自ら省みぬ。蒙古に入りてより二年、上海にありし時より合せ數ふれば、三年餘りの、年月を、未開の地に送りて、讀書の暇さへ乏しく、眞に時勢後れの身となり了りぬべし。かゝる身にてなほこゝにをらんは、時勢後れの事のみ出て來べく、かくては、蒙古のために

もわが國のためにも、何のなす所も非るべければ、兎に角、一旦、歸朝し、よき代り人だにあらば、一二年間、日本にて、充分に研究し、新知識と新抱負とをもちて、再び入蒙したしとの念止みがたくなりぬ。よりてこれを內田公使迄聞えあげしに、恰も日清談判の終り頃にて、小村大使も滯京せられ、御兩方共、そは是非一先歸朝して充分靜養せる方よからんと勸め給ひぬ。されど我は適當なる、代り人なき限りは、日本に三人の留學生(此留學生は、日蒙兩國間の交誼を永く繼續せしめ度考よりまづ王、王妃に御勸め致し次に其父兄等に說きて漸く奮發せしめたるものなり)のみを止めおき身は再び入蒙せん心組なりしが、幸ひよき代り人を得たれば、初志の如く一二年間日本に於て研究すべく歸朝せんことに決定しぬ。

二　故郷の山河

明治三十九年一月二十四日、天津總領事伊集院の君より、歸朝するには適當の同行者あり、疾く立ち給へと電信にて知らせ給ひぬ。此は內田公使が我がために好き道づれがなと、豫ねて打合せ給はりしによれり、明日は陰曆の元日にて、支那の天地は、總ての機關を休止すべく、鐵道も其呼吸を休むべければ、强ても今日の中に出て立たんと俄かに用意を急ぎつ、午後二時三十分の滿車に乘るべく停車場に趣く。

公使は門迄送り給はりて、障る事あれば停車場へは得行かず、心して旅しませなど懇ろなる御言葉賜はる。我がために第二の家なる公使館の何とはなしに離れがたくて幾度もかへりみしつ、停車場へは、內田夫人服部夫人、川島夫人、其他の貴婦人も見送り給はる。肅親王及び同妃には御名代を給はり、喀喇沁王御夫婦は御自身に送り給はりぬ。王妃の切なる御心は、我爲めに、一異例を作りて、外人を停車場に見送り給ひしにも知らる、王妃は御情深き御言葉の數々を賜ひしが、近き內に

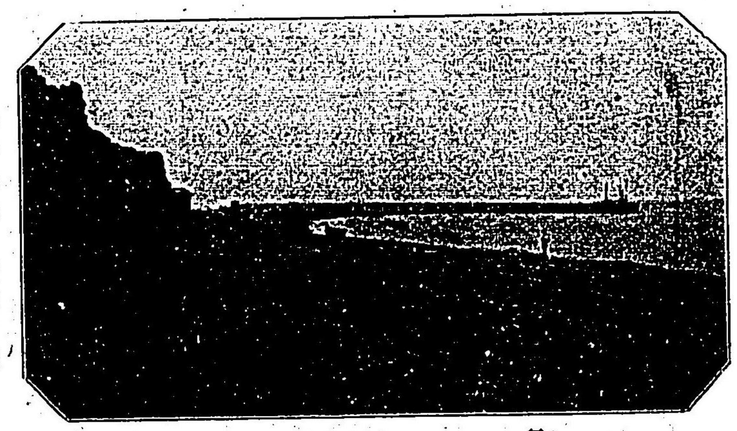


山海關日本守備隊

必ず再び入蒙してよと手を執り給へり。一二年の中にはと御答申上げしに、誓ひたるぞ忘れ給ふなと仰せ給はりて、よゝと泣き給ふ、王妹も生徒も劣らず泣きぬ。他の貴婦人方も、此樣に眼うるほはされぬ。我はいと堪え難く、胸塞がりて慰めん、に言葉も出てず、同じく暗涙に咽びしが、時迫りたれば、盡きぬ名殘を短き言葉に殘して、互に健康を祈りつつ我は、日本に留學すべき、王府重臣の女にて、何蕙貞、于保貞、金淑貞の三人を伴ひて車室に搭じぬ。流笛は情を新にすべく、新なる景に向つて我等を迎びぬ。

六時過ぎ天津へ着す、總領事及び司令官の御名代の方々に迎へられつゝ、それより領事の厚き御心に出てたる西洋馬車にのり、かねて計らひ給はりし、日本旅館扶桑館に投じぬ。

三人の喀喇沁少女は、境を跨えて旅すること初めてなり。草も木も、山も川も、彼等の眼には、最初の珍らしさを以て映じぬ。流車は如何にして疾走するかは、皆彼等の腦を刺戟せし、大なる疑問にてありき。彼等は又此日を以て、初めて日本風の生活に接したるなり。我は實の母もなすまじと思はるゝ程の多くの世話を燒き



新　島　襄

第十二章　歸朝日記

ぬ。可笑しきは、食事の時なり、彼等は窃かに我が方を見つ、我れが箸を執れば、彼等も執り、置けば置き、挾めば挾み、啜れば、啜る、若し肉の一片を落さば、彼等も落すべく、或る村里の百姓が、彌陀堂の僧に、客振りを學びし昔話も思ひ出されて、獨りをかしかりき。

晩餐の後に、淋しきかと問へば、先生の在すに、何でか淋しかるべきと答ふるも可愛し、やがて床に入りしが、彼等は皆快く眠りぬ。されど我は俄かに子を持ちたらん母の心にもたぐへつべく、何となく氣遣しうてねむられず。三度迄起き出て、隣室の彼等を見まはりしに、何時も身動きさへせて熟睡してありき。

一月二十五日は、朝疾く、伊集院總領事が、音づ

れまゐらず、一年の月日は、愛子達の見まかふばかりに育たれ、昨年よりは大層おとなしう、御ものごしにこやかに家庭の御親しみも偲ばれぬ。或は厚き御もてなしに、いと嬉しう春風の中にある心地して、あかず語りつゝ時を過しぬ。午後は天津婦人會の姉君達の催ふし給はりし、送別會に臨みぬ。打ちとけての物語は、何事も興ありて、いと樂しく半日を過しぬ。

一月二十六日は、領事の御邸にて我等のために送別の筵開かれ。

一月二十七日は、神尾司令官より晩餐の席に招かる。方々の厚き御心のいと嬉しく、深く謝しまつりぬ。

一月二十八日、午前十一時二十分總領事御夫婦を始め其他の方々に見送られ、日本郵船會社天津支店員兒島喜代藏の君の同行を得て、秦皇島（チンポロンダオ）行の滊車に搭じぬ。太沽よりの航路は尚堅氷に鎖されたればなり。

午後六時過ぎ、秦皇島（チンポロンダオ）に着す。今朝天津の司令官より電報ありたればとて、駐屯隊の方々出迎へられ、何くれと便宜を與へらる。それより直に滊船へ乘込む、其夜出帆すべき筈なればなり。

一月二十九日、荷役間に合はずとか、船同じ處に停る、船嫌ひの人あり。昨夜我等の一行と同じく乘込みしが、夢の裡に渤海を横ぎりたくと、乘るとひとしく、船室に入りて夜具被ぎしが、此朝食事畢るも起き出てず。如何なしけんと、ボーイの行き て尋るに、動搖烈しく、いと堪え難し、未だ芝罘へは着せずやと問はるゝに、ボーイは 獨り可笑さを忍びて船は尚港にあれば動搖もさまで烈しからずと答ふ。然りしかと客は直ぐさま起きいで、不思議の眼を睜るに、陸も動かず、船も動かず、秦皇島の光景は眼前に横はれり。さては船の走りしは夢か、動搖せしは神經かとて、自ら一夜の過勞を嘲りしに、忽ち頭も輕く、胸もすきて、食事欲しといふに、聞く人皆をかしがりて、船暈は神經より起るぞ多きなどいひあへり。

午後三時半、錨を拔く、汽車に驚きたる生徒は、汽船にも同じ驚きを繰り返へしぬ。渺漠なる廣野にのみ慣れし目には、渺茫たる海には、奇異の眼を睜はりぬ。只彼等はいと無邪氣にて、船の動搖には、いさゝかも怕るゝ色なく、船暈さへ感ぜざりしには、心安う思ひぬ。

一月三十日、朝の程より、右岸に、翠色白砂を望みつゝ、午前十一時二十分、芝罘に着

す。小幡領事に迎へられ、直ちに領事館に入る。

一月三十一日、昼の程は、市街など見て歩るく、夜いたく寒ければ、温浴取りて寢に就かんと、階下に至り、ボーイに浴湯は尙在りやと問ふに、ありと答ふ、さらば浴を取りて來らん程に、鍵せずに待ちてよと、呉々言ひ聞けて浴場へ赴きぬ。浴場は本館の外にあり、若し鍵せられんには、室に入ることを得ざるなり。さて浴を了へて來しに、戸は鎖してあり、押せども開かず。

鍵せるなり、我が言葉が、ボーイに通ぜざりしかとも思ひしが、さにはあらず。我が吩咐を聞かざりし他のボーイが斯くせるなりとは後にて知らる、斯くて我は閉出されたるなり。萬事不案内の我は何處へ行かんやうもなし、しばらくの後本館近き隣家に行き事の由を告げしに、妻女の君の親切によりて事は忽ちに辨じて、立往生もせず、氷ともならず、室に歸りしが膝栗毛の一節を演じたるやう覺えて獨りをかしかりき。

二月一日、朝の程より雪降りいて忽ちにして世はみな銀世界と化し景色いと美はし。

二月二日、領事をはじめ館員の君たち正金銀行の支店長杉原の君に送られて、出て立つ、此日波高く、舟は木の葉の如くに、掀弄せられて、中々本船へ密接すべくもあらず舟の高く浪頭へ上りたる其機を外さず本船へ乘り移るなるが、誤たば巨浪の手に攫まるべく其危險其困難いふべくもあらず。海に慣れぬ。生徒等は如何に恐ろしくや感ずらん、泣きもや出さんと煩ひしが、何れも健氣にて、仕損じもなく乘移りぬ。

二月三日は、終日海上に過しぬ。

二月四日、仁川へ着し、日露戰爭に最初の記臆を留めたる「ツリヤーグ」の艦沈せられしあたりに投錨しぬ。打見れば水若く波白く、鳥は無心に飛んで、亦當年を語るべきものなけれども、我は無言と沈默との間に得知らぬ快感を感じて暫しは打ち見やりて佇みたりき。

上陸すれば、加藤御夫婦は京城へ赴かれて在さず。此處は日本居留民一萬二三千と聞えて流石に市街は日本風なりき。

二月五日、午後出帆、六日釜山に着す、有吉領事は、我等のために何にくれと便宜得

させ給はりぬ。市内を見物するに、居留民は一萬七八千とのことにて總ての設備が日本風といはんよりは、寧ろ日本共まゝなりといふを適當とするに似たり。

京釜鐵道の起點停車場は實に壯大なるものなり。此處より山陽鐵道の連絡汽船に搭ずれば、九時間にて門司に着すべし。

二月七日、長崎へ着く、山は綠に水は清し、我は三年の日月を十年も過たらんやうに覺えて、今故國の山水に接する嬉しさ、既に懷かしき人々の面影さへ目の前に浮びて、胸は頻りに喜びの皷動を高めぬ。生徒等は互に山水の美を稱へつゝ斯る美しき國にあらんには、幾年の長きも厭はじ只力のかぎりいそしみてなど語り合ひぬ。

二月八日、門司に入り、九日神戸に着す、大阪の友なる人夫婦して此處まで來り迎へ給はる。午後六時發の汽車に乘り、翌十日午前九時半事無くて平らかに東京新橋には着きぬ。

三　贈花の主三瀨眞氏を弔ふ

去ぬる年の初夏梢の綠色を增し、雨紫に藤花打ち旅情いとも濕かなりし朝、我を沈思の中より救ひしは、日本北海道札幌農事試驗場に於て三瀨眞と記せし一通なりき。三瀨とは未知の姓、未見の人なれば、危みつゝ封を開きしに我が旅情を慰むる言の數々に加へて、北海道と喀喇沁とは緯度に於て大差なければ、此地の植物は御地にも生育せん、試に栽培せられずやとて草花の種子十餘種を贈られたるなり。かゝる時こそ人の誠の殊に嬉しく覺えて種子を學堂の庭先へ下せしが、夏より秋へかけて、こゝに小さき日本の色彩を現出して、撫子の花、金鳳花、桔梗、酸漿、其他美はしき西洋花の紅紫などかれこれおのがじじ咲き匂ひぬ。

我は此花を眺め、其香に觸れて、眞に故國にありて親しき友垣と語り合つるが如き心地して、朝夕に少からぬ慰藉を感じたりき。其後三瀨氏は文もて今井歌子女史を紹介せられき。兩氏は我が在蒙中厚き同情を寄せられて屢々書狀を送られしまゝ、庭の草花におく霜しげく虫の音もいとゞ細りし秋の末蒙古を辭して歸朝の途に上り、今茲明治三十九年の二月十日東京に着きしが、舊知舊友は我に靜座を許さず。三月上旬鄕里松本にかへり、同下旬上京して、少しく閑を得たれば今井女

史の友情を謝し兼ねて三瀬氏の近況を尋ねばやと、櫻花咲き出でし四月四日飯田町に今井氏を訪ひぬ。思ひきや、贈花の主は春一月風寒ふして早梅寒さに凋みし夕白玉樓中の人となりぬとは、我は、はげしき威に打たれて亦言ひ出でん詞も知らざりき。

あわれ此秋、蒙古に蒔きし日本の草花の數々は、同じ色香に匂ふらんものを此花ありて其人なし、來らん秋毎の思更に露深からしめぬ。嗚呼あはれ。

附　錄　（うれしき便り）

このごろは、たいへんあたゝかになりました、先生は、貴國におかへりになりましてから、ごきげんよろしうございますか、私は大そう先生を想ふて居ます、皆先生のおてかみの話を、福晉（王妃）からききましてたいへんうれしうございました、生徒たちは、毎日鳥居先生の敎をきゝます、先日は、肅親王が蒙古に來られまして（王爺福晉）は守正、崇正、統正、三學校聯合の歡迎會を開きました、私たちの遊戯は先生の敎へて下さつたのでございます、演說は張先生の敎へてあります、三學生は貴國に行きましてから、たくさん勉强できます、先生ごしんせつにして下さいますから私たちは、たいへんありがとうございます、先生は何年過ぎたら私たちの學校に來て下さいますか、私たちは、皆たいへんまつてをります、私たちは、ねつしんに勉强しますから、先生どゞごあんしん下さいませ。さよなら

光緒三十二年四月二十五日

河原先生　　蘭　眞（王妹）

先生福安生等一切遵依訓誨時々用功萬求我師不棄生等再晤尊顏親受教誨不勝
盼切仰望之至

肅此敬請

並叩　謝

厚賜

受業　蘭貞謹啓

河原先生

先生は貴國にかへりましてからごきげんよろしうございますか、こちらは、王爺、福晉、學生等もみな無恙でございますからご安心下さい、福晉から先生の貴信のことをきくまして私たちは、たいへん喜んでをります、三學生からも信が來ました、先生がおかーさんのやうだと、よろこびます、私たちは、たいへんありがたうございます先生どうぞたび〳〵おてがみを下さいませ、それからお寫眞も下さい、何年の後に又蒙古に來て下さい、學生たちはそれをたいへんに望んでをります、先日は肅親王が蒙古にいらしやいました、三學堂は、歡迎會を開きまして、たいへん面白くありました私たちの遊戯は鳥居先生がして下さいました、肅親王爺も、王爺も、福晉もよろこびになりました。

光緒三十二年四月二十八日　舒靜

河原先生

このごろは、なつになりましたて、あたゝかでございます、先生は、貴國へお歸りなさいましてごきげんはよろしうございますか、先生のところへ三がくせいがまゐりまして、生徒はみなよろこんでございます、せいとはみなあり、がとうございます、鳥居先生も毎日ねっしんにおしへてくださいます、私たちも毎日よろこんで居ります、先生ご安心下さい、毎日の功課は庚年のと同じでございます、先生は又何時いらっしやいますか、生徒はみなたいへんまつてをります、おてがみを下さってありがたうございます、又たび〳〵下さい。さよなら、

光緒三十二年四月二十五日　水仙

河原先生

先生は、貴國にかへりましてからごきげんよろしうございますか、先生の下さったおてがみは、たいへんありがたうございます、生徒たちはこちらで鳥居先生の教

をうけて一日も廢學いたしません、生徒たちは毎日先生を想ひます、先生どぞ又來て下さい、先生は幾年過ぎたら又來ますか、先生のおしやましんはみえますけれども、先生の御眞身が見えませんから生徒たちは、たいへんおもひます。

光緒三十二年三月二十五日　　秋　兒

河原先生　升　啓

河原先生はごきげんよろしうございますか、私共は皆よろしうございます、先生ご安心下さいませ、先生はこちらに何年の後にまた來ますか學生等は毎日々々たいへんそれを望んでをります、先生どうぞはやく來て下さい、先生どぞ、しやしんを下さい。

光緒三十二年三月二十二日　　玉　梅

河原先生

先生は貴國にかへりまして、ごきげんよろしうございますか、學生等は皆よろしうございます、みな島居先生とよく勉強してをります、先生ごあんしん下さい、私たちはよく勉強して居ります、けれどたいへん先生を想ひます、どーぞたびたびおてがみを下さい。

光緒三十二年四月十七日　　佑　貞

河原先生

先生は美國に行かれまして、御自體はごきげんよろしうございますか、此方で學生等は皆よろしうございますから何卒先生はご安心くださいませ、只先生が御手紙を下さいましたのを學生等は拜見致しまして、大層喜んで居ります、實にありがたうございます、先生は美國からお歸りになりまして又何年の後に蒙古に來て下さいますか、此ことを學生等はたいへん望んで居ります、何卒先生御身體をごたいせつに遊ばしますを祈ります。

光諸三十三年(明治四十年)十月二十一日　　毓正女學堂生徒拜

河原先生

次の二通は、喀喇沁王の手書にして、前なるは、我が彼地に着くや間もなく、北京なる我が公使館に送らせ給へるもの、後なるは、其後一年餘を經て下田先生に致されたるものなり、何れも忘れ得ぬ紀念にもと茲に錄しぬ。

逕夏者、接來函備悉一切、政躬篤祐諸多順適爲祝、河原先生已於中歷初三日安抵敝邸、一路均好、晤談後欣、知學問有素且遠途跋涉、絕無畏難之色、志趣甚遠、從茲龍塞雁門同進文明、不第蒙古之幸、亦亞洲之慶也、諸承閣下分神、今又專差兵辨護送足見交誼之篤、更見閣下之鼎力、感謝莫名、寄來合同底稿、既經閣下與內田公使所定甚妥、當可照辦、現擬本月初十日行開校式、惟此女學本數千年所未有、今幸得良師、雖生徒愚頑、當可向化也、殊堪爲全蒙女學起點慶矣、陽函鳴謝即頌日社

初五日　喀喇沁王頓首頓

拜啓、陳者久耳芳名恨未識荊、敝地敎化、未興人民頑陋、女學尤所未講、去年曾創辦學堂以開風氣、惟師範難求、幸令徒河原女史具此熱心、不以寒苦背來敎授、感佩之至、茲未年餘而進步之速、實出意外、將來敝地婦女之輸入文明、無非出自先生也、惟去冬契約暫定一年、今將期與女史續約多處、數年俾得敎化普及地方、幸甚、尙望函致女史請其多處不勝盼甚、再前承厚貺、拜謝々々、久慕芳名未知何日得拜識也、專此敬請文安。

光緒三十年十一月十七日

喀喇沁王福晉

下田先生粧次

拜啓、時下嚴寒の候益々御勇健、且つ此度は、令孃御儀久々にて御歸國慶賀此事に存上奉り候。昨年中は屢次御書通被下其都度小生方よりは疏音申上恐縮の外無御座候。

陳ば令孃には滿二ヶ年喀喇沁王府女學堂の創設に盡力せられ、其効果は意外の良好を顯はされ、喀王王妃御兩人共深く感謝の意を表し居られ候。過日も、王妃、小生を召寄せられ若し出來得べくば、六ヶ月丈にても宜敷旨申出られ且つ喀喇沁地方の多數可憐の兒女は、令孃の敎導宜しきを得たるを以て今日にては文明の光に浴する初階段に達したる次第にて、彼等は若し令孃の歸國が永き別れと相成り候次第を知らば、決して一通りの說諭にては承知せざるべく、又王、王妃に於ても肯者の杖を失ふ心地す、何とか、貴下に小生より書通懇望の上再度令孃の來蒙を勸誘すべき樣依賴有之候。小生は、深く、王妃の御懇情を謝し、定めて貴下に於ても此等の談話を聞き及ばれる時は、欣喜せらるゝは必定なれども、河原令孃は、已に喀地女敎

の基礎を成したる功勞者にも有之、此度歸國の上再び來清無之とも已に、王妃と令嬢との間柄には永年變らざる深交なるを以て、如此人物が日本に在り遠く、王妃教育事業の應援をなすとも一の最も緊要なる事なり、此上は、王妃御主宰の女學堂は、日本に於ける他の德望才學ある教師を聘用せらるゝとも決して此御事業が頓挫する樣の事は無之、小生が斯く申すも全く小生よりしても、又內田公使よりしても、誰れにても一言反對する事の出來ざる理由あり、そは、河原令嬢が御歸國の上終身の計を爲さるゝ一事なり、此事は、王妃も御承知の事ならんも此丈は河原女教習の友人一同皆々切望する所に有之と申上候ひし處。王妃は夫れは誠に然るべき事にて此事に對して二の矢を放つ勇氣なしと申され、切めては、王及び王妃が切望の程又、女生徒が、河原令嬢に對する熱情及び喀喇沁王所管地方一般に、河原令嬢に對し心服し居る事丈にても、貴下へ御傳へ吳れられたしとの御依賴有之候に付、小生は此義は御依賴なくとも小生より通報致すべく心得居る事に付、喜而書信中に認め申送り且つ他年面會の期も有之候はゞ必ず申傳へんと御申上候ひしに王妃は至極御滿足を表せられ候。（下略）

明治三十九年十二月廿二日　　在清國北京日本公使館　高洲太助

河原忠樣

左はこれ崇正小學堂第一回卒業式に王の親しく臨ませ給ひて、生徒に與へられたる訓諭辭なり。

今日爲諸生在本學堂第一期、初等小學卒業日、本王來臨此會、授與文憑、並述心所希望、實課欣幸諸生怪受此數年之教育、開我蒙古、數千年未有之風氣、從此進步、無已源々粗繼、循天演之進化、今後蒙古日進文明、其起點皆由諸生始、眞可爲諸生、賀並有所希望者、爲諸生告之。

古者三代而上、甚重小學庠序學校、載在禮經、近今列强、亦莫不以教育普及、爲第一要義、凡子女年及五六歲、必令入學、遠者、罪其父兄、同謂强迫教育也、其學皆教普通、由初等而高等、而中學、莫不皆然、實教以作人之道、以養成國民、資格、是精神之教育也、朝廷近來、力圖維新、注重學校、諭旨頻頒、我蒙古地當北壁、久列藩封、尤不可不急々於教育、是以本

王創立此學堂、並請給予出身、現已蒙。

乞准、則是今後遂漸推廣、及於全蒙古同進文明、何可限量、諸生今得風氣之先、三年於茲、在學朝夕勤勉、而各教習等循々善誘、以得今日之効果、雖然前途正遠、學問無窮、所望於諸生者、切勿一得自限、畫地止步、自誇自足、以致日後反省、負此日所得之良基礎、更望各宣自重自愛、注意人格、以爲後來之表率、是諸生既先受教育之薫陶、他日爲我蒙古數千年來所未有、他日亦必能成蒙古古來未有之大事業、大名譽、本王亦有榮焉、是則予心所甚喜而深望者也、諸生其各勉旃。

語學笑話

支那語を文字上より日本語に釋し又日本語を同樣に支那語に釋す時は往々滑稽なる意味となることありとて或人の語るをきくに。

例

一、日本語を其文字の上より支那語に釋したる例。

御蔭樣で母は近頃大變丈夫になりました。託福託福我母親近來大變了。爺們了。

即ち御蔭を以て母は近頃大變りして男子になりました)

右の意釋は左の如し

託福々々我母親近來很康健。

二、支那語を文字の上より日本語に釋したる例或支那の先生が其門弟の一日本人に向ひ。

○老沒見了想明白這個話的意思麼。

(あなたは此「老沒見了」といふ言葉の意味がわかりますか)

△我明白了。(私はわかりました)

○是甚麼意思啊。請說說。

(どういふ意味ですかいふてごらんなさい)

△人老了眼睛就花了看不眞了是這個意思不是。

(人が年をとって眼がかすんではつきりともものを見ることが出來ないといふ意味ではありませんか)

○懊想的倒有道理意思可是不對這個的意思是許多的日子沒見、

(あなたが此文字によってさう考へらるゝのは尤もですが意味は違ひます

此意味は久しく御目にかゝりませんでしたといふのです）とて大笑ひなりしといふ文字の上より直譯する時は此の如きこと少なからずとぞ。

蒙古土産　大尾

不許複製
蒙古土産奥付

明治四十二年十一月一日印刷
明治四十二年十一月四日發行

著者　一宮操子
發行者　東京市京橋區南紺屋町十二番地　增田義一
印刷者　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　佐久間衡治
印刷所　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市京橋區南紺屋町十二番地　實業之日本社
電話新橋八七四番・四二九六番
郵便振替貯金口座參貳六番

定價金八拾錢

東京・堂
東海堂
北隆館
上田屋
至誠堂
良明堂
大阪市
盛文館
杉本書店
京都市
東枝律書房
名古屋
川瀨代助
久留米
菊竹金文堂

（實業之日本社大賣捌所）

人生の妙味

英國ジョン、ラボック博士著　正木照藏君譯述

大版上製金文字入
洋裝頒美本
◎正價八拾錢
◎郵稅八錢

男兒生れて邪大の氣あり、誰か向上を希ひ、成功を欲せざる。然れども若人は其前に於て先づ「如何にして生くべきか」を研究せざるべからず。人の一生は如何なるものか、如何にして世を渡るべきか、人生の幸福は如何にして得べきか、是れ本書の說明せる所にして眞に是れ人生行路上に於ける唯一の案內書也。ラボック博士は敎育家として歐米に其名高し、本書は即ち博士の名著を譯述せるもの、金篇廿章悉く實際的の名論卓說にして、敷衍の旨を通俗の文に寓し、銀深の義を淺易の辭に托す。洵に是れ近時の快著、譯文輕妙にして美彩果々たり。

男爵　辻新次君序　波多烏峰君著

逆境離脫策

◎上製金文字入
◎正價壹圓
◎郵稅八錢

佐藤一齋曰く「人邪唯だ憤の一字のみ」と苟も發憤精勵倒れて後やむの覺悟だにあらば、人生何邪か成らざるを憂えん。本書說く所三百餘項、或は竹林に入りて志を立てたる王陽明あり、廓淨を食として苦學したる倉成龍渚あり、拙劣と罵られて奮發したる葛飾北齋あり、錐を以て股を刺したる蘇秦あり、悉く是れ憤の一字を以て逆境を離脫して成功せるもの、實例數百一讀懶夫をして起たしむべき痛快文字なり。加ふるに前人未發の活機を說き以て順境に入るべき大道を示す、嗚ふ天下幾萬の逆境兒!!　速に本書に來れ!!!

十大德敎家傳

農法學博士新渡戶稻造君序　山方香峰君著

大版全一冊美本紙
頒入上製金文字入
極美本
◎正價貳圓
◎郵稅書留小包料拾八錢

▲聖德太子▲弘法大師▲菅原道眞▲親鸞聖人▲日蓮大士▲中江藤樹▲山鹿素行▲伊藤仁齋▲貝原益軒▲二宮尊德

▲新渡戶博士は本書に序して、德性涵養の良法は英雄豪傑の傳記逸話を愛讀するにありて、古人が傳記に依りて感奮立志せる例を擧げ……▲更に曰く。文章流暢にして平易一般青年の愛讀に適し、貴要の諸點は往々にして原文を引用して論據を强ふするが如き用意到れるものあり。……▲殊に本書に多とすべきは、德敎を興ふるを目的として編まれたること是也。故に其目的とする所學說の說明にあらずして之に由て青年に興ふる感化の甚大なるにあり。本書の如きは時節柄風敎を資け、迷へる者の爲に一條の光明を興ふるものと言ふべし。と、以て本書の眞價を知れ。

若宮卯之助君新著

米國史

上製大版六百廿頁
金文字入頒美本
◎正價壹圓七拾錢
◎送料拾八錢

著者久しく米國に遊學して米國史を研究す、歸來我國に完全精密なる米國史なきを慨し、非常なる抱負と熱心と自信とを以て本書を述作す。

行文絕妙、讀見趣邁、觀察奇拔、蓋し歷史界空前の一大名著たるを疑はず。

東京市南鍋町　實業之日本社　（振替口座東京六番）　（電話新橋四八七番）　全國書店賣捌

實業之日本社發行圖書總目錄

●史傳地理

農法學博士新渡戶稻造君序　山方香峰君著
●十大德敎家傳　大版上製美本　正價貳圓　書留小包拾八錢

若宮卯之助君著
●米國史　大版上製金文字入　正價壹圓七拾錢　郵稅拾貳錢

ルーズヴェルト原著　法學士遠山熙君山崎榛處君共譯
●偉人クロムウエル　大版上製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

農法學博士新渡戶稻造君序　山方香峰君著
●新武士道　大版金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

岡新三郎君著
●編武士道實話　上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

山方香峰君著
●一國一人近世人傑傳　上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

山方香峰君著
●世界人豪の片影　中版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

報知新聞記者佐瀨醉樓君著
●當代の傑物　上製金文字入　正價六拾錢　郵稅八錢

實業之日本記者石井白露君著
●最近米國成功十傑（再版）　全一冊美本　正價五拾錢　郵稅六錢

福田琴月君著
●偉人の少年時代　上製金文字入　正價六拾錢　郵稅八錢

中野觀象君著
●最新外國商業地理　大版上製金文字入　正價五拾五錢　郵稅八錢

宮田千年君著
●世界商業史綱　大版上製金文字入　正價六拾錢　郵稅八錢

土方伯愿序　大隈伯序
●東亞の大寶庫滿洲案內　今井忠雄君著　全一冊三百八頁　正價廿五錢　郵稅六錢

加藤政之助君著
●滿洲處分　大版全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

長谷川宇太治君著
●渡清案內　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

市吉徹夫君著
●地理と商品　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅廿四錢

大隈伯序　三宅石賀田中館博士道傳文
●天下の記者　薄田斬雲君著　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅五錢

鈴木光次郎君著
●現代百家名流奇談　中版全一冊　正價廿錢　郵稅四錢

米國文學博士　梅田又次郎君著
●在米の苦學生及勞働者　中版全一冊　正價廿錢　郵稅四錢

桑谷克堂君著
●成功秘訣 富豪の面影 全一冊美本 郵税六拾錢 正價五拾錢

實業之日本社編著
●日本 富豪の家風 全一冊美本 郵税六拾錢 正價五拾錢

報知新聞記者 中村木公君編
●名家長壽實歷談 大版上製金文字入 郵税八拾錢 正價八拾錢

京都大學圖書館員 佐竹磯雄君編
●幕末 勤王烈士手翰抄 上製金文字入 郵税壹圓五拾錢 正價壹圓五拾錢

米國エール大學教授 哲學博士朝河貫一君著
●日本の禍機 大版全一冊 郵税五拾錢 正價五拾錢

前カラチン女學堂教頭 一宮操子女史著
●蒙古土産 大版上製金文字入 郵税八拾錢 正價八拾錢

◎經濟產業書類

東京學校法政大學講師法學士 工藤重義君著
●經濟財政要義 大版上製金文字入 郵税壹圓 正價壹圓

米國エデルストン氏著 蘆川忠雄君譯
●處世經濟法 中版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

米國イリー博士 クヤックワー博士共著
●經濟學提要 大版上製金文字入 郵税壹圓 正價壹圓

米國ヒンクス博士著 別府丑太郎君譯述
●產業合同論 大版上製金文字入 郵税八拾錢 正價八拾錢

商業學士小林行昌君共著
●中等經濟學 大版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

●思想健全法 中版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

英國ノールソン著 湯浅生譯
●精力增進法 大版全一冊 郵税五拾錢 正價五拾錢

堀内新泉君著
●簡易安眠法 中版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

英國グランヴヰル博士著 海嶽生譯
●神經健全法 中版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

英國グランヴヰル博士著 海嶽生譯
●頭腦明快法 中版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

蘆川忠雄君著
●最新記憶法 中版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

英國グランヴヰル博士著 蘆川忠雄君譯

◎商業實務書類

米國ウオルター、デー、ムッディー著 堀内新泉君譯
●新販賣術 大版全一冊 郵税五拾錢 正價五拾錢

米國店頭讀本

金澤商業學校長中野觀象君編 畠山親成君譯
●實用商業文練習帖 和本 郵税六拾錢 正價六拾錢

土屋長吉君著
●商戰必勝 中版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

土屋長吉君著
●商工執務法 大版全一冊 郵税五拾錢 正價五拾錢

カーネギー著 伊藤重次郎君譯
●實業の鍵 大版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

土屋長吉君著
●應用經濟學 大版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

淺井藤俔君著
●最新農業經營 大版全一冊 郵税四拾五錢 正價四拾五錢

富入長右衛門君著
●經濟的育蠶法 大版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

加藤政之助君著
●韓國經營 大版全一冊 郵税四拾五錢 正價四拾五錢

川上善兵衛君著
●葡萄提要 大版上製金文字入 郵税壹圓八拾錢 正價壹圓八拾錢

◎衛生書類

醫師武藤喜作君著
●家庭應急手當法 中版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

報知新聞記者 中村木公君編
●名家長壽實歷談 大版上製金文字入 郵税八拾錢 正價八拾錢

東京朝日新聞記者 杉村縱橫君編
●肺病全快談 中版全一冊 郵税五拾錢 正價五拾錢

農學博士 玉利喜造君著
●冷水浴の實驗と學理 中版全一冊 郵税四拾五錢 正價四拾五錢

萬朝報記者 中島氣藤君著
●禁酒禁煙の五年間 大版全一冊 郵税四拾五錢 正價四拾五錢

醫學博士加藤照麿君校閲 四谷龍顔君譯著
●最新育兒法 全一冊美本 郵税七拾六錢 正價七拾六錢

前金澤商業學校長 永野耕造君著
●商業修身訓 上中下三冊 郵税四拾五錢 正價四拾五錢

中野觀象君著
●實用商業書信文範 大版全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

商業學士 小林行昌君著
●英和商用文教科書 大版上製金文字入 郵税四拾五錢 正價四拾五錢

カーネギー著 小池靖一君譯述
●實業の帝國 附力士傳 郵税壹冊六錢 正價壹冊五錢

カーネギー著 伊藤重次郎君譯
●富の福音 洋裝全一冊 郵税四拾錢 正價四拾錢

男爵前島密君序 澤村菊池兩君共著
●戰捷國民實業指針 大版全一冊 郵税五拾錢 正價五拾錢

藤岡秀太郎君著
●商品と其荷造法 大版全一冊 郵税五拾錢 正價五拾錢

愚崎貞夫君著
●生命保險提要 大版全一冊 郵税五拾錢 正價五拾錢

市吉敬夫君著
●銀行と會社 中版全一冊 郵税四拾五錢 正價四拾五錢

土屋長吉君著
●商品と商業經營 中版全一冊 郵税壹冊六錢 正價壹冊五錢

土屋長吉君著
●最新販賣術 中版全一冊 郵税壹冊六錢 正價壹冊五錢

土屋長吉君著
●商家繁榮策 中版全一冊 郵税五拾錢 正價五拾錢

●最新商業要綱　土屋長吉君著　並價上製八拾五錢　並製七拾錢　郵稅各八錢

●簡易商業學　土屋長吉君著　上下二冊　郵價四拾錢　稅八錢

●外國商業地理　中野觀象君著　最新　大版上製　金文字入　郵價五拾五錢　稅八錢

●世界商業史綱　宮田千年君著　大版上製　金文字入　郵價六拾錢　稅八錢

●最新事務法　男爵後藤新平君序　四村正雄君著　袖珍上製　金文字入　郵價六拾錢　稅六錢

●英國商業實務　商業學士小林行昌君　下平精一君共著　大版上製　金文字入　郵價壹圓廿錢　稅小包拾貳錢

●最新式記帳法　實業之日本社著　都倉義一君著　大版全一冊　郵價七拾錢　稅八錢

●單式簿記　中野觀象君著　横幅　改良　大版全一冊　郵價廿五錢　稅四錢

●英文簿記例題　樺山純一君著　大版全一冊　郵價貳拾錢　稅四錢

●利廻早見表　千代田生命保險會社會計課長　奥石丑太郎君著　大版全一冊　郵價廿四錢　稅廿四錢

●實業讀本　近江屋商店員　奥村等一郎君著　和製全一冊　美本　郵價廿五錢　稅廿四錢

●最新商業算術　五十嵐次郎君著　上製　金文字入　郵價八拾錢　稅八錢

●商賈と勘定　四岡英夫君著　中版全一冊　郵價四拾錢　稅七錢

●商業書信活法　中野觀象君　高間昭君共著　最新　大版全一冊　郵價五拾錢　稅七錢

●商業簿記獨習書　竹内正太郎君著　全一冊美本　郵價七拾錢　稅八錢

●最新商業簿記　竹内正太郎君　村嶽玄君共著　大版全一冊　郵價　稅廿錢　稅六錢

●最近商業書簡と書式　瀧澤君著　中版全一冊　郵價廿四錢　稅廿四錢

●商品教科書　波邊久太郎君著　最新　大版全一冊　郵價五拾錢　稅八錢

●商人と文章　四岡英夫君著　中版全一冊　郵價廿五錢　稅廿四錢

●小僧學問　篠田鎌造君著　俗通　袖珍　總振假名　郵價貳拾四錢

●立身と繁昌　四岡英夫君著　中版全一冊　郵價廿四錢　稅廿四錢

●地理と商品　市吉徹夫君著　中版全一冊　郵價廿四錢　稅廿四錢

◎雜書類

●大隈伯百話　大隈伯自序　江森藤吉君編　大隈伯肖像　大版上製　金文字入　郵價貳圓五拾錢　書留小包拾八錢

●日本の禍機　米國ミシガン大學教授哲學博士朝河貫一君著　大版全一冊　郵價五拾錢　稅六錢

●獨笑珍話　實業之日本社著　鈴澁生著　袖珍　美本　郵價四拾錢　稅六錢

●都市の研究　伯爵大隈重信君　島田三郎君序　三宅磐君著　上製　金文字入　郵價七拾錢　稅八錢

●ルーズヴェルト全集　山崎梅處君譯述　大版上製　金文字入　郵價　稅八錢

●新武士道　農法學博士　新渡戸稻造君序　山方香峰君著　大版上製　金文字入　郵價　稅八錢

●武士道實話　岡三慶君著　大上製　美本　郵價八拾錢

◎修養書類

●品性の勢力　米國前大統領ルーズヴェルト氏原著　山崎梅處君譯述　大版上製　金文字入　郵價　稅八錢

●自助の精神　蘆川忠雄君著　中版全一冊　郵價廿五錢　稅四錢

●新自助論　波多野烏峰君著　中版全一冊　郵價五拾錢　稅六錢

●新武士道　農法學博士新渡戸稻造君序　山方香峰君著　大版上製　金文字入　郵價　稅八錢

●武士道實話　岡三慶君編　上製　金文字入　郵價八拾錢　稅八錢

●健全なる常識　波多野烏峰君著　大版上製　金文字入　郵價　稅八錢

●沈着心修養　蘆川忠雄君著　中版全一冊　郵價廿五錢　稅四錢

●交際術修養　蘆川忠雄君著　大版全一冊　郵價　稅八錢

●默想　樋口配天君著　中版全一冊　郵價廿五錢　稅四錢

●日常の言語　蘆川忠雄君著　中版全一冊　郵價廿五錢　稅四錢

●人格の鍛錬　蘆川忠雄君著　中版全一冊　郵價廿五錢　稅四錢

●偉人修養の徑路　高須梅溪君著　袖珍上製　金文字入　郵價五拾錢　稅六錢

●向上的青年　波多野烏峰君著　中版全一冊　郵價廿五錢　稅四錢

●意志の鍛錬　蘆川忠雄君著　中版全一冊　郵價廿五錢　稅四錢

●讀心術修養　蘆川忠雄君著　中版全一冊　郵價廿五錢　稅四錢

●克己心の修養　蘆川忠雄君　山崎清風君共著　大版上製　金文字入　郵價　稅八錢

江口浩東君著
人格の光輝　大版全一冊　正價六拾錢　郵税八錢

英國マイアー氏著　波多野烏峰君譯
樂天の勝利　大版全一冊　正價四拾錢　郵税六錢

米國マーデン氏著　波々野烏峰君譯述
快活なる料神　中版全一冊　正價四拾錢　郵税四錢

法學博士和田垣謙三君序　蘆川忠雄君著
人生の慰安　大版全一冊　正價五拾錢　郵税八錢

島田三郎君序　蘆川忠雄君著
常識の修養　大版全一冊　正價五拾錢　郵税八錢

男爵澁澤榮一君序　蘆川忠雄君著
實務才幹訓練　大版全一冊　正價五拾錢　郵税八錢

男爵前島密君序　蘆川忠雄君著
人生の奮闘　大版全一冊　正價五拾錢　郵税六錢

英國男爵エーヴベリ卿　ウヨック著　正木照磨君譯
人生の妙味　大版上製　金文字入　正價八拾錢　郵税八錢

伯爵大隈重信君序　蘆川忠雄君著
樂天の生活　大版全一冊　正價五拾錢　郵税八錢

實業之日本記者　岳淵生著
品性の光輝　中版全一冊　正價卅六錢　郵税五錢

蘆川忠雄君著
心機轉換法　中版全一冊　正價卅四錢　郵税五錢

米國トマス、ラーサング氏著　堀内新泉譯述
不平慰安法　大版全一冊　正價卅五錢　郵税六錢

蘆川忠雄君著
觀察力修養　中版全一冊　正價卅四錢　郵税五錢

英國フヰリス氏著　蘆川忠雄君譯述
雄健の氣象　中版全一冊　正價四拾錢　郵税四拾錢

堀内新泉君著
自彊術　中版全一冊　正價五拾錢　郵税六拾錢

蘆川忠雄君著
決斷力修養　中版全一冊　正價卅四錢　郵税五錢

實業之日本臨時增刊
勇者の世界　大版全一冊　正價卅貳錢　郵税貳錢

實業之日本臨時增刊
人格の修養　大版全一冊　正價卅貳錢　郵税貳錢

蘆川忠雄君著
人格の鍛錬　中版全一冊　正價三十五錢　郵税四錢

佛國大學主人ピエール著　前田慶穎君譯述
商才修養の實驗　中版全一冊　正價五拾錢　郵税六錢

野田吐電君著
成功實例　青年立身訓　中版全一冊　正價卅錢　郵税四錢

學生必讀書類

高橋五郎君著
英語正確使用法　上製　金文字入　正價六拾錢　郵税六錢

上海同文書院校友谷原孝太郎君著
日清英會話　上製紙函入　正價壹圓　郵税八錢

高橋五郎君著
英語熟達法　中版全一冊　正價五拾錢　郵税六錢

高橋五郎君著
英語句讀法　中版全一冊　正價六拾錢　郵税六錢

英國リチヤードソン氏著　實業之日本社譯述
最新讀書法　中版全一冊　正價四拾錢　郵税六錢

山方香峰君著
讀書便覽　三六版美本　正價卅錢　郵税四錢

米國理學士大木新三君　鈴木精一君共著
新式代數難問詳解　上製　金文字入　正價七拾錢　郵税八錢

渡邊磯兵衛君　小里運八君共著
實用珠算教科書　大版全一冊　正價五拾錢　郵税八錢

高岡、上田、中富三君共著
最新珠算教科書　大版全一冊　正價卅五錢　郵税六錢

五十嵐次郎君著
最新商業算術　上製　金文字入　正價八拾錢　郵税八錢

米國文學博士　梅田又次郎君著
在米の苦學生及勞働者　中版全一冊　正價卅錢　郵税四錢

佐藤甞吟君著
學生の前途　中版全一冊　正價卅五錢　郵税四錢

家庭書類

京都師範學校教諭　木内菊次郎君著
花むすび　大版全一冊　正價五拾錢　郵税六錢

梅田鍵藥君著
新案菓子製法　大版全一冊　正價五拾錢　郵税六錢

報知新聞記者　中村木公君編
婦人のかゞみ　大版上製　金文字入　正價七拾錢　郵税八錢

醫師　武藤章作君著
家庭應急手當法　中版全一冊　正價四拾錢　郵税六錢

實踐女學校講師　長谷川岩吉君述
刺繍獨習書　大版全一冊　正價卅錢　郵税六錢

京都師範學校教諭　木内菊次郎君著
折紙と圖畫　大版全一冊　正價卅錢　郵税六錢

山方香峰君著
日常生活　衣食住　大版上製　金文字入　正價壹圓卅錢　郵税小包拾貳錢

梅田鍵藥君著
家庭菓子製法　全一冊巻末　正價五拾錢　郵税六錢

村井弦齋君著
婦人の日常生活法　特別上製　壹圓廿錢　並製巻末壹圓　郵税拾貳錢　郵税八錢

石塚月亭君編
弦齋夫人の料理談　第一編　第二編　二冊　正價各六拾錢　郵税各八錢

東京職工學校教諭　木田鶴治君著
家庭料理　大版全一冊　正價七拾錢　郵税八錢

四谷龍顯君著
太郎の質問に母の答　中版全一冊　正價廿錢　郵税四錢

堀内新泉君著
如にゝ與へたる母の書簡　前編四拾錢　後編五拾錢　郵税各六錢

●家庭日常の實驗　報知新聞記者　天野旭嶺君編　大版全一册　正價四拾錢　郵税六錢

●女子處世訓　米國女學士ベエン氏著　實業之日本社譯　三百五十餘頁　正價廿五錢　郵税六錢

●日本料理法　赤堀菊子　赤堀鉴吉　三井共著　大版一册　正價七拾錢　郵税八錢

●衣裳かゞみ　婦人世界臨時增刊　菊版全一册　正價壹拾五錢　郵税壹錢五厘

●婦人の重寶　西谷龍顯君著　大版全一册　正價五拾錢　郵税六錢

●最新育兒法　加藤醫學博士校閲　西谷龍顯君譯著　全一册美本　正價七拾錢　郵税六錢

●子供の研究　中島文學博士序　長野縣高等女學校長波多野市松君著　大版上製金文字入　正價七拾錢　郵税八錢

●婦人消息文　三輪田眞佐子女史序　鈎天淵君著　大版全一册　正價五拾錢　郵税八錢

●健全なる家庭　三輪田眞佐子女史序　阿部長峡君著　中版全一册　正價廿五錢　郵税廿四錢

●富豪の家風　實業之日本社編纂　全一册美本　正價五拾錢　郵税六錢

●偉人の少年時代　福田學士君著　上製金文字入　正價六拾錢　郵税八錢

●教育勅語要義　文學博士井上哲次郎君校閲　植村道次郎君著　大版美本　正價廿五錢　郵税廿四錢

●實用家計簿記　日本石油合資會社社長　竹田常吉君著　大版全一册　正價四拾錢　郵税六錢

●食物かゞみ　婦人世界臨時增刊　菊版全一册　正價壹拾五錢　郵税壹錢五厘

●婦人の慰藉　婦人世界臨時增刊　菊版全一册　正價壹拾五錢　郵税壹錢五厘

●樂しき婦人　婦人世界臨時增刊　菊版全一册　正價壹拾五錢　郵税壹錢五厘

◎處世書類

●生存競爭法　前田越嶺君著　大版全一册　正價五拾錢　郵税八錢

●最良の機會　蘆川忠雄君著　中版全一册　正價廿五錢　郵税四錢

●紳士と社交　園田孝吉君序　波多野烏峰君著　上製金文字入　正價七拾錢　郵税八錢

●向上的處世法　ジョンソン氏著　山崎梅處君譯述　大版全一册　正價五拾錢　郵税八錢

●日常の言語　蘆川忠雄君著　中版全一册　正價廿四錢　郵税四錢

●光榮ある生涯　ミラー博士著　波多野烏峰君譯述　中版全一册　正價四拾錢　郵税六錢

●人生の半面　ゼローム氏著　波多野烏峰君譯　中版全一册　正價廿六錢　郵税六錢

●人生の光明　鈴木孔龍君著　中版全一册　正價廿四錢　郵税四錢

●成功の順路　波多野烏峰君著　中版全一册　正價廿五錢　郵税六錢

●樂天的處世法　實業之日本社編纂　大版全一册　正價廿五錢　郵税廿四錢

●成功座右銘　實業之日本社編纂　袖珍美本　正價拾錢　郵税貳錢

●逆境離脫策　男爵辻新次君序　波多野烏峰君著　大版上製金文字入　正價壹錢　郵税八錢

●處世經濟法　米國エデルストン氏著　蘆川忠雄君譯　中版全一册　正價廿錢　郵税四錢

●處世の標準　波多野烏峰君譯著　中版全一册　正價廿五錢　郵税四錢

●富豪實驗教訓　英國リッチー氏著　山崎梅處君譯　大版全一册　正價六拾錢　郵税八錢

●同情の勢力　實業之日本臨時增刊　大版全一册　正價廿貳錢　郵税廿貳錢

●社會側面觀　波多野烏峰君著　上製金文字入　正價七拾錢　郵税八錢

●處世座右訓　實業之日本社編纂　袖珍美本　正價貳拾錢　郵税貳錢

●成功錦囊　實業之日本社編纂　中版全一册　正價廿錢　郵税六錢

●應對談話法　蘆川忠雄君著　中版全一册　正價廿五錢　郵税四錢

●人生の眞相　ゼローム氏著　波多野烏峰君譯　中版全一册　正價四拾錢　郵税六錢

●致富成業策　正岡藝陽君著　中版全一册　正價廿錢　郵税四錢

●處世教訓　米國富豪グラハム翁書信　實業之日本社譯　成功者の信書　正價四拾錢　郵税八錢　特別上製五拾五錢

●英文處世教訓　米國ジョンソン、グラハム翁著（右の原著）　中版全一册　正價廿五錢　郵税四錢

●處世の金科玉條　實業之日本臨時增刊　大版全一册　正價廿貳錢　郵税貳錢

◎作文書類

●實用作文法　文學士　久保天隨君著　中金文字入　正價四拾錢　郵税六錢

●書信文作法　同　中金文字入　正價四拾五錢　郵税六錢

●叙事文作法　同　中金文字入　正價四拾五錢　郵税六錢

●論文作法　同　中金文字入　正價四拾五錢　郵税六錢

●儀式文作法　同　中金文字入　正價四拾五錢　郵税六錢

同 ●美文作法　中版金文字入　正價四拾五錢　郵税六錢

鵜飼天淵君著 ●文章大成　大版上製金文字入　正價壹圓　郵税壹錢

同 ●書信文大成　上製大版金文字入　正價八拾錢　郵税八錢

實業之日本社著 藤原楚水君編著 作文自在 ●美辭寶鑑（再版）　上製金文字入　正價七拾錢　郵税八錢

三輪田眞佐子女史序 鵜飼天淵君著 ●婦人消息文　大版金一冊　正價五拾錢　郵税八錢

中野觀象君著 實用 ●商業書信文範　大版金一冊　正價四拾錢　郵税四錢

商業學士 小林行昌君著 ●英和商用文教科書　大版上製金文字入　正價四拾五錢　郵税六錢

早稻田政學士 瀧澤清君著 最近 ●商業書簡と書式　中版金一冊　正價廿五錢　郵税四錢

四岡英夫君著 ●商人と文章　中版金一冊　正價廿五錢　郵税四錢

京都大學圖書館員 佐竹砂織君編 幕末 ●勤王烈士手翰抄　上製大版金文字入　正價壹圓五拾錢　郵税拾貳錢

細川新泉君著 ●姐にたる母の書簡　前編四拾錢　後編五拾錢　郵税各六錢

實業之日本記者 岳淵生著（公四狀） ●新時代の青年　中版金一冊　正價四拾錢　郵税壹錢

中野觀象君 高橋昭君共著 新案 ●商業書信活法　大版金一冊　正價五拾錢　郵税六錢

中野觀象君編 實用 ●商業文練習帖　島山觀成君書　和習字手本　正價六拾錢　郵税四錢

日本一の實業雜誌

實業之日本

一冊價拾壹錢　郵税壹錢
○月二回一日十五日發行
○十二冊前金郵税共壹圓
卅三錢廿四冊貳圓六拾錢
一ヶ年定期增刊共參圓也

下の問題に苦むあり人

▲本誌は左の問題を悉く解決す▼

▲如何なる實業の方法が成功するか＝▲如何にして獨立自營すべきか
▲如何なる人格の人が成功するか＝▲如何にして失敗を避くべきか
▲如何なる體格の人が成功するか＝▲如何にして逆境に處すべきか
▲如何なる商業の實務が成功するか＝▲如何にして健康を增進すべきか
▲如何なる心得の主人が成功するか＝▲如何にして職業を獲べきか
▲如何なる心得の店員が成功するか＝▲如何にして品性を修養すべきか
▲如何なる種類の職業が成功するか＝▲如何にして顧客を吸集すべきか
▲如何なる海外發展者が成功するか＝▲如何にして海外に渡航すべきか
▲如何なる處世法が成功するか＝▲如何にして記憶を健全にするか
▲如何なる新奇の工夫が成功するか＝▲如何にして人生の慰安を得るか

▲右の問題を確的に解決する者は唯本誌のみある▼

日本一の少年雜誌

日本少年

一冊定價拾錢郵税壹錢
◎毎月一回一日發行
◎六冊前金郵税共六拾錢十二冊壹圓六拾錢△郵券代用一割增

父兄は見落す勿れ

▲小學校の教授法と密接の聯絡ある者は少年雜誌中唯本誌あるのみ
▲文部省の假名遣ひに依る者は少年雜誌中本誌最も嚴正なり
▲故に學校教育を補佐する者は少年雜誌中本誌に如くものなし
▲少年の視力を勞すること最も少なき者は本誌を以て第一となす
▲少年の頭腦を勞すること最も少なき者は本誌を以て第一となす
▲少年に娯樂を與へ同時に智識を與ふる樣編輯に苦心せるは本誌也
▲少年の最も喜ぶ懸賞物考へ物の一番多き者は本誌なり
▲小學校教員諸氏の間に最も評判よき者は此『日本少年』なり
▲常に本誌を愛讀する少年は必ず健全なる發達を遂ぐるや疑なし
▲故に家庭教師の代理を爲すは少年雜誌中本誌に如くものなし

▲最も健全なる少年雜誌は本誌也▼

▲左の如き少年教育に注意する少年雜誌ありや▼

日本一の婦人雜誌

婦人世界

一冊價拾五錢郵税壹錢五厘
◎毎月一回一日發行
◎六冊前金郵税共九拾錢十二冊壹圓七拾五錢郵券代用一割增

此外に婦人問題ありや

▲如何にせば幸福の婦人となるか＝▲美貌は如何にして保つべきか
▲女子の修養は何が大切なるか＝▲健康は如何にして保つべきか
▲幸福なる結婚は如何にすべきか＝▲婦人病は如何に治療すべきか
▲如何にせば良人に愛せらるゝか＝▲家政は如何に整理すべきか
▲如何にして家庭を樂しくするか＝▲衣服は如何に着用すべきか
▲小兒は如何に裸育すべきか＝▲食物は如何に料理すべきか
▲男兒は如何に養育すべきか＝▲召使は如何に使用すべきか
▲女子は如何に養育すべきか＝▲社交は如何なる方法にすべきか
▲男兒は如何に娶らしむべきか＝▲文藝の趣味は如何にして養うか
▲女子は如何に嫁がしむべきか＝▲如何なる職業が女子に適するか

▲本誌は左の婦人問題を悉く解決す▼

▲右の問題を懇切に解決する者は唯本誌あるのみ▼

日本一の少女雜誌

少女の友

一冊定價十錢郵稅一錢
◎毎月一回一日發行
◎六冊前金郵稅共六十錢
十二冊一圓十六錢
△郵券代用一割增

花の如き少女雜誌

▲學校教育は大道なり本誌は其大道間を連結する唯一の近道也！
▲材料の集輯と選擇の爲には金力勞力精力の最上を盡すは本誌也
▲記事の調和と排列とに苦心焦慮する事本誌の如きは天下類なし
▲新しき知識を與ふると同時に樂しき娯樂を供ふるものは本誌也
▲內容の整頓せる外形の完備せる事本誌の如きは少女雜誌中第一
▲決して嘘をつかぬ少女時間を正確に守る少女を養成するは本誌
▲汚い猜疑心や醜い嫉妬心なき玉の樣な少女を養成するは本誌也
▲富めるを誇らす貧しきを意とせざる少女を養成するは本誌なり
▲常に本誌を愛讀する少女は必ず健全なる發達を遂ぐるや疑なし
▲故に學校教育を補佐する者は少女雜誌中本誌に如くものなし！

▲左の如き特長を有する少女雜誌ありや▼

▲最も完備せる少女雜誌は本誌也▼

日本一の幼年雜誌

幼年の友

一冊定價拾錢郵稅五厘
◎毎月一回一日發行
◎六冊郵稅共五拾八錢
十二冊同壹圓拾錢

△三歳以上の幼男幼女によく分る玩具と教育を兼ねた雜誌です
△三つ子の魂百迄と云ふ如く幼年の感化ほど恐ろしいものはありません
△其幼年に最も良き感化を與へる者は此『幼年の友』が第一です
△『幼年の友』は幼年の智情意を巧く平均に發育さする樣出來て居ります
△『幼年の友』は始んど全部彩色の繪で面白いお話が出來て居ります
△『幼年の友』は又假名と繪と組合せて自然に教育する樣出來て居ります
△『幼年の友』にハメ繪もポンチも繪探しも遊戯もあります
△『幼年の友』には又親に必要なる幼年教育の材料が澤山あります
△『幼年の友』を見る子と見ぬ子とは乳を呑む子と呑まない子と程違ひます
△『幼年の友』は少年少女諸君にもまた大層面白い雜誌であります

◎幼男幼女を持つ兩親兄さん姉さん是非御覽なさい

62338

信頼すべき日記帳

實業之日本社編輯局編纂

明治重寶日記

金文字總クロース

價五拾錢

郵稅八錢

實業之日本社發行の重要日記は隈なく注意行渡り飽くまで實用的にして便利重寶、眞に日記中最良の者なりとの好評を博せり四十三年度は更に

多年日記を附ける人の經驗に基き

新意匠を凝らし内容を整ひ他に類なき日常必需の附錄を附し繪畫を挿入し

此上一點の申分なき迄に完備整頓せり

用紙は舶來最上、體裁は優美高尚、製本は堅牢無比、當に是天下一品

他に大見ざる特色

▼舊曆を附す來年は曆本に舊曆を省き本日記以外舊曆を見る不能

▼衛生欄を家庭曆に新設す將來の特色の外に諸病の手當を知り得

▼季節表を色刷にして卷頭に掲ぐ卷末の新舊曆對照表と共に無類

▼詩文金言歴史繪畫等を適宜に配設す趣味豐富仁の模倣を許さず

▼豫定欄適要欄は本日記特得のもの有益無比なるは新に言を不須

▼附錄には各宮家御住所△皇室皇族郵便電信規則△諸稅規則其他

東京 實業之日本社 電話新橋七八四番 郵便振替口座三二六番

GANSHODO·SHOTEN
KANDA TOKYO
東京神田
巖松堂書店

CL
NO. 62338

292.26
I765m

026703-000-5

292.26-I765m

豪古土産

一宮 操子/著

M42

ADD-0399